

国^{こく}

境^{さかい}

国際理解教育試論

越 田 稜

「まえがき」にかえて

「国家とは領土と国民とからなり、これらを統治組織し国を代表する主権を加えて、国家の三要素とよぶ」

(ある高校用教科書より) — そういうものののだろうか。

「国境とは主権国家の排他的統治権の限界線であり、普通海洋、河川、山稜など自然物を利用するか、協定により経緯線をもって定められる」(ある国際法入門書より) — そんなことなのであろうか。

「難民とは、ある国家における戦禍、政難、天災を避け、国境を越えざるをえなかった流民、不法侵入者、亡命者の類である」(ある国語辞典より) — そういうことになるのだろうか。

……身の危険を感じ、豊かなる山河、いやそれが荒野であろうと不毛の地であろうと、生まれてこのかた慣れ

親しんできた故郷を、顧みる思いも奪われて去らねばならない、ごくごく当たり前の人びとが、疲労しきった足どりで、見知らぬ地界を彷徨う。親を失い、子を見捨て、心ならずも友を裏切り、あらがうことの夢もとくに失せた民の群れ。着のみ着のまま、飢えすら忘却した民のやから。怒りも涙もかれはて、うす蒼い戦慄が小刻みに行き交う果てしない道すがら。志と意とまるで無関係に、いつの間にか辿りついたくにざかい。カンボジア難民はノンチャン村に屯した。

……ネオンまたたき、クラクシン鳴り響く巷間から、飢えと渴きを充たし乍ら、心身とも重装備した国民が、はつきりとした行程を踏み、ある目的地を目ざしてつき進んでいく。調査と救援の為と、そして未知なる世界への好奇心をかき抱いて。それでも一応善意のひとかけらをもち合わせて。肉親と帰れる家を確実に失わないという保証つき。タテマエ・ホンネとも美しく飾りたて、時には故国の称賛すら期待して。迫りくる不安も生き甲斐と感じ、そして彼等は予告された時間に、帰路の定まった折り返し点、くにざかいに辿りついた。

——一九八〇年八月二十九日、くもり。ユニセフに勤めるスエーデン人ウルフ氏に先導され、タイ・カンボジア

国境に我々一行は向った。国境にはあと数キロの地点。

難民をすし詰めにしたタイ国の大型バスとすれちがった。みどりの田んぼで水牛が物憂げに曇天を見上げる。我々を乗せた小型バスの前方には砂塵をあげて十数台の救援物資を運ぶトラックが黙々とあった。泥水の池であひるが遊んでいる。赤色の給水車が何台も砂塵のあい間に見え隠れした。小学校で子供達が体操をしている。すれちがうタイ国家の軍用車に迷彩色の兵隊が満載していた。小さな水たまりに水蓮の花が浮いている。……あたりに、みどりが忽然として失われ、土がむき出しになった。ノンチャン難民村だ。

人間の味が枯れ切った蠶く無機物体の群れ。国家庄によって絞り出された不条理の塊。アイスキャンデー（どうしてこんな所に？）を差し出した子供の眼に、いようもないやすらぎを覚えたが、何とそれはうたかたの安堵であつたらうか⁹¹。

(1) 拙稿「くにざかい」より（国際教育フォーラム

「国際教育フォーラム」第八号・一九八〇年V

所収）。私が初めてインドシナ難民のキャンプ（難民村）を訪れた時の印象を記したもの。

一 国際理解教育

自国の行為を棚上げし、たとえ“棚下ろし”を余儀なくされても、その行為を精一杯正当化し、情報網を最大限に自己陣営に都合よく駆使させ、相手側の行為による脅威を殊更煽りたてることに互いに躍起になっている今日の国際状況に（今日に限らず、かつてもしもこれからも）、一種のもどかしげな無常感を抱きつつも、何とかこの油かすに汚れた鉄鎖の輪を一輪でもときほこそうと、私は教育者のはしくれとして、それなりに力を注いできた。それが徒勞に終始し、その為にさいなまれたとしても私はそれを若者の前で今後も続けていくであろう。各々の支配権力構造の力学的戯曲構成のメカニズムについて、決して無知蒙昧でない筈ではあるが、結局はその構造と機能との厚き壁の表面だけを、ただひたすら、そうと触っているだけなのかもしれない、或いはそれしかできない自分なのかもしれない。日本と中国の不可思議な密月、東南アジア諸国での不協和音、イスラム教が十重二十重に絡むアフガニスタン問題やイラ・イラ戦争、アフリカ各地の“解放”国家にまつわる陣痛と産褥熱、東欧にくすぶる“灰とダイヤモンド”、EC諸国内の平和行進、そして日米間の長い寒い経済摩擦……そして

これらの場に暗躍として出没する超大国の魑魅魍魎。

厚き壁を前にして、今さら乍ら学校や社会教育の場において国際理解教育を高唱しても確かに徒勞感だけが漂う結果になるかもしれない。しかし私は敢えてこれから巢立つ若者達に期待し、例えかなりの部分で裏切られたとしても（それは決して彼等若者達だけのせいではない）、共に生きる世界の、支配権力機構に属さない、或いはその恩恵にあずからない多くの無告の民と、はるかかなたにある平和共存を目指していかなくはならないのであらうと思う。無告の民との連携といっても、勿論互いの相克、葛藤は当然存在するであらう。従つて国際理解教育にあつては、ただセンチメンタルな心情の吐露であつたり、理念的・知識的にのみ走つてしまつたり、外国語にただ堪能であるという技術論的側面のみの強調であつたり、又グローバリズム的発想はよいとして、細部にあつて、軽薄なる配慮の施しをしまふといふ（即ち特殊な側面に性急なる普遍化を施すといふ）ことのないよう充分なる注意が必要であらう。⁽¹⁾

国際政治のリアルな力関係と並行して、いやその力関係によるひずみがあればこそ、しばしば無用の長物・無力の権化とされてはいるが、国際連合（以下国連）の地

道な存在にはこの際特に注目していきたい。一九七〇年代の石油危機以来、今さら乍ら、資源・エネルギー問題或いは食糧・人口問題は、各国にとって決して他人ごとではなくなり、そこに各国の露わなエゴイズムの錯綜とタテマエ論の横行があるとはいへ、国連の場に於いて、世界の人びとは何がしかの望みを国連に託そうとした。

貧困と差別と飢餓による構造的な権侵害に対する先進工業諸国の贖罪意識や無意識なる自己満足と、発展途上国の支配権力者（彼等がはたしてどこまでその国の民衆の意志を代表しているかどうかは解らないが）の権力維持との妥協の産物かもしれないといへ、取り敢ず、一九七二年にはストックホルム国際環境会議、七四年には「新国際経済秩序」宣言採択、同年のユネスコ総会に於ける「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人權及び基本的自由についての教育に関する勧告」（以下ユネスコ国際教育勧告）、七六年の「国際人權規約」の正式発効等が国連ないしはその周辺でなされた。これらを契機として新しい、しかも前向きな国際理解のあり方が問われ、ただ「世界を知る」という範囲にとどまるのではなく、積極的平和の実現、人權尊重の確保を地球市民的構造の上で把えようとする動向が世界各地の、

特に民衆（NGO—非政府組織）の中から、にじみ出てきている（「平和」とか「人権」というタームの各国、各民族の共通認識が、しかとそこに存在するかどうかは別として）。

私も加わっている「国際教育フォーラム」⁽²⁾でも微力乍ら新動向の国際理解教育、平和教育のあり方を問うてみた。⁽³⁾又共同研究として行った国際理解教育カリキュラム作成の作業の過程から、国際平和、国際協力を問いなおしてみた。⁽⁴⁾「フォーラム」メンバーないしは共同研究者の今のところ一応到達しえた国際理解及びその教育のあり方に対する見解、及びそれに加えて私自身が考えている課題と展望は、概ね次の如くである（考察するのみに終らず、一部では実践の形をもって研究の具体的立証に努めている）。

(一) 「平和」の概念を把える際、平和を単に行動的暴力（戦争・抗争等）の対立概念としてのみ考えるのではなく、汎く構造的暴力（差別・人権侵害・不公正・或いは資源エネルギーの偏在とその使用偏在、公害等）をも含めて把握しなくてはならない。また種々戦争体験の継承は、被害体験のいい伝えのみならず、加害者としての責務をも含めた継承とならねばならず、今日現に行われ

ている各地域の抗争及びその被害、又は背景をも絡み合わせて、なされなくてはならない。

(二) 異文化への理解には、細心なる多元的・多角的な視座が必要であるということ、異文化交流のもたらすデメリットの計算がなされていなくてはならないということ。加えて、文化・文明の「近代性」についての問いなおしと堀りさげの必要性。特に学際的アプローチによる相互の価値観への切りこみ。

(三) (一)、(二)の視点に立ち乍ら「人権」学習の施しが、なされなくてはならないが、その際「いのち」とか「生きる」ということへの解釈過程に、自己本位の生きざまを強く反映させることを戒めるとともに、かつ、にも関わらず、自己の日常の生きざまへの深い立ち返りも要請されるといふこと。他者の重みと痛みで、始めて自己の自由の享受獲得があるとの認識の上に、世界各地に存在する人権侵害の実態を知るとともに、⁽⁵⁾国内にある人権差別（被差別部落の人びと、在日韓国人・朝鮮人・中国人、身障者等への）に対しても、そして今日的課題としての学校（管理社会の縮図？）・家庭内に於ける相互不信に対しても、自分自身の問題として把える態度をもつことが、国際理解の原点的要素として考えられる。

(四) 国際交流、国際協力に関しては、以上の観点から配慮がなされるべきであり、いたずらに友好・親善至上主義や自慰的同情に堕することのないように努めなくてはならない。身近な周囲の生活から多くの機会を求めて、真の交流・協力のあり方を、そして真の問題意識・社会認識を身につけなくてはならない。

以上の課題と展望は、模索の一端の披歴に過ぎない上に、現実には予備校化した学校教育の中で、浮き足立った若者達、虚飾の平和に安じている生徒達には、どうも説得力に欠けるということも又否めない淋しい事実であり、虚空に物いう、いたたまれなさを感じることも認めざるをえない。加えて国際政治・国内政治のリアルな、おぞましき圧力は、余りにも簡単にささやかな望みすら消え去らしてしまう。しかしそれは或いは若者達に対する不信の表われと、怠惰な現状追隨主義からの哀感かもしれない。若者達のひそやかな、そして根強い平和志向と人権感覚は、外見に賑わいのないものかもしれないが、かえってそれ故に、力強い底流となって息づいているようにも思える⁽⁶⁾。

(1) 国際理解教育については、米田伸次「国際理解教育の展望と課題」(日本私学教育研究所「私学教育」

〔第十二号・一九八一年〕所収)を参照。

(2) 国際教育フォーラム……「ユネスコ教育勧告」「国際人權規約」に触発され、一九七八年に発会、平和教育・国際理解教育の推進をはかるうとしている研究・実践グループ。

(3) 国際教育フォーラム「高校生の平和認識——予備調査報告(一九八〇年)」。

(4) 城戸一夫・太鼓矢晋・米田伸次・越田稜「高校社会科教育における国際教育の実践と充実のために」(国際理解教育研究所「国際理解」八十三号・一九八〇所収)

(5) 世界の「虐げられた人々」に対する大変示唆に富む文献として、今野敏彦の「世界のマイノリティ」(評論社・一九六六年)がある。

(6) 拙稿「現代若者批判」に抗って」(学習院高等科「研究紀要」八第十一号・一九八一年〕所収)参照。

二 発展途上国問題

一九八〇年代の国際情勢を顧みると、第二次世界大戦後のそれとは違った形とはいえ、米ソ両超大国による新たな冷戦の様相が窺える。多極化現象と核兵器開発と石

油危機というファクターがそこに加わり、先の冷戦とは変容した政治力学のゲームが展開されているが、そのはざまにあって、いわゆる発展途上国の問題が、ゲーム展開に大きく左右し、国際問題の上に、浮上してきたことについては、最近よくいわれるところである。しかし私は、このゲーム展開の場に横たわる途上国の影響を、あたかもゲームプレー上のコマ動かし具としてしか観ていない超大国の、いや先進工業国の、いや途上国の為政者に、いや実はもっと遺憾に思うのは、私の接する若者達のかんりの部分にもあることを淋しい思いで感じている。若者達の国際理解に対する関心が、このような次元にとどまっている、或いはとどまらせている要因を考える時、国際理解教育のカリキュラム作成の第一歩に、発展途上国の問題を、どうしても絡ませておき、正しい認識がそこでなされなくてはならないと思うのである。

大部分の一、二次産業生産物を発展途上国に依存している日本、しかもその資源・エネルギーの大量受容により経済発展をしている日本が、途上国の貢献度と相互依存の関係を無視しえるものではないし、又単にサバイバル発想によっての途上国への関心だけがそこにあってはならない筈である。国益優先のサバイバル論は、確かに

途上国認識への仕方のない契機だと仮りにしても、一日八万人から十五万人餓死・病死者を出している途上国の現状を考えた時、世界の国の数で約八割、人口でも七割から八割を占める途上国の存在を、日本サイド（或いは先進工業国サイド）だけで、したり顔をして、生き残り哲学を弄して認識するということは、余りにも身勝手な発想というべきであろう。サバイバル論を超えて、発展途上国の、特に民衆レベルとの連携による自己開発を含めた正しい途上国への認識がなくてはならない。生き残りといえは、今日熱くくりひろげられている先進諸国内の反核運動に、途上国のサバイバルへの視点が欠けているのが気になる。途上国の民衆の眼に反核運動がいかに映っているのかの考慮がなされなければならないし、彼等を巻き込んだ形で平和運動のあり方が考えられなければならない。

発展途上国問題については、“開発教育”の名に於いて今日世界レベルで、その学習がなされ始めてきている。

“開発教育”(Development Education・ユニセフ・UNICEF・国連児童基金)が最初に使用したことば)の“開発”という語感から、日本では産業開発、土地開発の“開発”がイメージされ、技術的開発

の指導教育といった意味合いで、どうも誤解と曲解がなされやすい。開発教育を「『開発』という語を、人類社会が内蔵する諸問題を解決し、あるべき未来を構築することと理解すれば、この教育がめざすものは、課題解決のために積極的に取り組む態度と実践をなにより企図するもの⁽³⁾」と定義づければ或いは正しいこのことばの解釈になるかもしれない。もう少し途上国との関連から解りやすく定義づければ、発展途上国に於ける諸問題について正しく認識、理解し、途上国をも含めて、特に先進国の人びとが、人類という立場に立ち、自らを顧みて自己変革を期する教育ということになるか。であれば「人間相互開発教育」とでもすれば、誤解されないですむかもしれない。

ことばの解釈の問題はさておき、発展途上国の理解教育に関して、ここ数年世界各地で、又は日本の一部で試行模索のうちにも、研究活動そしてそれにもなり実践行動が行われている。オランダとかスエーデン等では、民間組織による開発教育実践が幅広く実施されているし、このオランダ、スエーデンに加えて、イギリス、フランス、フィンランド等では公教育の中に、開発教育カリキュラムが具体的におり込まれている。各種の論文、報告

書⁽⁴⁾が既に出されており、発展途上国理解、及び協力の現状について知ることができる（なお国連機関のユニセフ・ユネスコ／UNESCO・国連教育科学文化機構／FAO／国連食糧農業機構／等も積極的に途上国問題に取り組んでいる）。いくつかの論文、報告書に眼を通して、私が感じ、かつ途上国問題（開発教育問題）については是非今後考えておかななくてはならない点を、以下五点ほどあげてみると……

(一) 発展途上国問題を殊更ぬき出し、開発教育の名のもとに、特殊な事項・課目として社会教育、学校教育の場に対処するのではなく、広く日常生活のあらゆる状況で理解を深めること。

(二) 例えば学校教育の場で、児童・生徒・学生に、想像力を喚起させるような環境づくりを用意すること。それは「感度の高い国民育成⁽⁵⁾」ということにもなるが、特に一過性の同情・関心だけでは（勿論それは重要な契機ではあるが）、優越感（途上国に対して）を抱かせる⁽⁶⁾、或いは別世界視を植えつけさせるといふ危険性をともなわせてしまう。感度の高い想像力があれば、同情や関心を超えて、他者の痛みや重みを知り、我が身を振り返えることができるのではないかということである。そして

持続性のある問題意識の確かめ合いが自己のうちにも芽生え、相互理解・相互共存・共感認識への重要なエネルギーも、感性として又習性として身につくのではないかということである。しかしこの感度の高い想像力育成にあたって、現代の若者達を取り巻く教育環境は、必ずしもその育成にそぐわないのが現状のようである。学校そして家庭までが、管理教育の支配の下で偏差値重視の病いに冒され、本来あらねばならぬ想像力発露の自由空間を失っている。情報過多、超物質主義も想像力を失わせることに、大いに加担している。このような環境では、とても違った世界の、餓死する人間の苦しさを想像してみることなど到底できるものではない。途上国理解に、日頃の「遊び」の場の供給の必要性を説く所以である。

(三) 社会・学校教育の場にある大人・教師達の、余り期待されえないものではあるが(一度身についたものは簡単には捨て去ることはできないものであるし、捨てたと思っても、それはポーズに終ることが多い)、意識改革の必要性。そして途上国問題に関する美辞麗句のお題目の羅列発言の慎しみ。若者達には、そのようなお題目は、決しておいしくない馳走の山である。途上国で働く海外青年協力隊員や若きボランティアの訥弁の方が、ど

んなにか若者達の食欲をそそのかすことであらうか。

(四) 発展途上国問題に対しては、きめ細やかな各論が必要であるということ。ひと口に途上国とか第三勢力とか南側諸国とかいっても、もろもろの条件下にあって、かなり特殊な要素が、各々の地域に存在しているということの認識が必要であるということである。途上国にもその途上度、いや途上そのものの意味合いの違いがある筈であるし、途上国と先進国の座標内でその相関性を見るだけではなく、途上国同志の相互作用にも視座を置かねばならないであろう。又ある途上国一国の支配権力構造にも視点を置かねばならず、最近とみにみられる途上国の国家主義のその出所を探り、かつその国家の民衆の立場と役割も、考察の対象としなければならない。できれば、身勝手な大国的発想の民族自決と内政干渉排除の、わけありげな御都合主義によって擬装無力を弄する勢力への容認ということになってしまふ。

(五) 先進工業国の発展途上国への協力援助が、いかなる意識でなされているか、ということについての認識の必要性。先進国の勝手な思いいれ(自己本位の贖罪意識、相手国の宗教事情について無視した自国宗教倫理の、かっこいい押しつけ、近代化神話のバーゲンセール等)

が、実は途上国（特にその民衆）に罪惡をまき散らしているのではないか、又新・統・植・民・地・主・義に陥ってはいないのであるとかの認識が必要であろうということである（先進国による「途上国自助」要請というカムフラージュに惑わされることなく）。

- (1) 武者小路公秀「国際政治を見る眼」（岩波書店・一九七七年）九四ページ及び一二七ページ以下参照。
- (2) 数字は日本赤十字社青少年課「青少年赤十字」（昭和80・一九八一年）より。
- (3) 前掲「青少年赤十字」所収の「国際理解活動への取り組み」筆者不明、四ページ参照。
- (4) 例えば室靖他「新しい国際理解教育としての開発教育」（国際理解教育研究所「国際理解」八十三号・一九八一年）所収、「Development Education - News and notes」(UNICEF, 1980)「その一」の開発と開発教育」（国際平和協会、平和教育シリーズ4・一九八〇年）、「人類共存のために——開発教育ハンドブック」（中央青少年団体連絡協議会・一九八一年）、国立教育研究所・開発教育カリキュラム研究会「研究会記録」、「開発教育を考える」（開発教育シボジウム実行委員会・一九八一年）等。

- (5) 「発展途上国・開発問題・国際協力」（国立教育研究所、開発教育カリキュラム研究会「研究会記録」・一九八一年）三九ページ参照。

- (6) 前掲「研究会記録」所収、鳥羽欽一郎の講演記録より。

- (7) アリフィン・ベイは「近代化とイスラーム」（めこん・一九八一年）で次のようにいつている。「発展途上の国が人間の精神的・物質的向上のための独自の概念を形成していくのは容易なことではない。（先進国の）近代主義者たちの文化的支配力が、西欧教育を受けた途上国のエリート——特に、若すぎて民族主義運動の形成段階における活動に参加できなかった人たち——の中であまりにも大きいからだ。（略）第三世界の国々がこのような「脱亜」あるいは「西欧志向」型のエリートによって支配されつつあるということは覚えておく必要がある。」（三ページ）文中（ ）は引用者によるもの。
- (8) 前掲「近代化とイスラーム」でアリフィン・ベイは次のようにいつている。「今日の工業化された民主主義諸国家にとっては、ある国家が西欧に「追いつく」ために近代化路線をとるのだと明言した時のみ、その

国は「分別あって正しい」のだ、といってもけっして単純すぎる言い方にはなるまい。それと異なった考えを抱く国家は、何が国民にとって良いのかもわからない。「どうしようもなく遅れている国」として片づけられてしまう。(略) 西欧や日本の近代化のパターンを繰り返さずに文化・政治・経済面における人間の向上を追求したいと主張する第三世界の人たちは、真面目に考えていないと非難され、負けおしみを言っていると嘲笑われる。”(二ページ)

三 東南アジアそして難民問題

発展途上国のうちでも特に東南アジアについて私が若者達に関心を寄せて貰いたいというのも、かつて日本がこの地域に軍事的、経済的に進出していったから、そして今日に於いても多量に経済進出し、種々問題をかもし出してゐるからという事情、そしてそれ故、少なからずこの地域への知識(偏見も含めて)が蓄積されているという事情の他に、私自身まだ明確に認知しえてゐるわけではないが、民族的にいて、さしあたって共鳴し合える要素が、ヨーロッパ(或いはその他の地域)よりは、東南アジアの方により多くありえるのではないかとの事

情からでもある。多少思いあがつた考えであり、批判されうる余地も多々存在することは充分にわきまえ乍らも、敢て東南アジア理解教育の必要性を、この事情があればこそ説きたいのである。途上国理解が、たやすいことではないことは前章でも触れたが、しかしせめて多少なりとも理解の途につかなくてはならないとすれば、他地域よりは入りやすいであろう東南アジアを、まずは理解対象にそえてみては、ということである(私の以前のからの関心と相俟って)。沉くアジア理解が必要となれば、東南アジアに限らず、むしろ日本との関わりあいからすれば、朝鮮、中国を、或いは石油問題からすれば、西アジアをこそ対象としなければならぬのであろうことは勿論なのだが、私自身ここ数年少々関わりをもったという経緯もあって、東南アジアに焦点を合わせて、本稿の先を続けていきたいと思う。

そもそも東南アジアといっても、元来欧米人が地球上の安易な分類上便宜的に名づけたものに過ぎず、別にその枠内にそれらしく各々の国、民族がまとまっているわけではない。現在存在する東南アジアに於ける国境線にしても、先進欧米人の思惑によるものが多い。従ってひと口に東南アジアといっても、その範囲は必ずしも明確

ではないし、当たり前のことではあるが、各地域によって、その民族性、風土、宗教等は多種多様をきわめる。

“アジアはひとつ”というのは、一種の欧米先進国に抵抗するいわゆるアジアのスローガンの意味が、かつてはあったとしても、仮りに東南アジアひとつとってみても解るように、それをおしなべて“ひとつ”として見ることは到底できない。ましてや日本をアジアの一員視するが如きは、文明生態史観の点からいっても、甚だ軽率な認識といわざるをえない（大東亜共栄圏思想のまやかしをわざわざ取り上げるまでもなく）。

しかし乍ら、私は日本と東南アジアの結びつきを考えた場合、ある面での「文化的共鳴」⁽¹⁾がどこかに得られるのではないかとも思うのであり、東南アジア理解の重要な因子になると考えている。東南アジア圏のうちイスラム教以外の地域は、ほぼ仏教圏（及び仏教やヒンドゥー教に近い民俗信仰圏）とみられる。そして日本も一応仏教を奉じる民族であるとすれば、その点での結びつきに考慮し、共鳴部分の存在をみきわめたいのである。確かに厳密な意味で、いくら日本も東南アジア同様仏教圏だからといって、全く同一の宗教的倫理意識が両者にあるなどとは思っていない。ただ仏教から派生した諸々の倫

理観みたいなものの中に、共鳴部分があるのではないかとみるのである。

国際理解に於ける異文化理解には、互いの相対性を確かめ合うことが強く要請されるところだが、もの賢くその相違性だけ認め合って不完全燃焼の理解・納得をするよりは、もう一步踏み込んだ理解作業課程に、むしろ積極的に文化間の共通項を見出す努力をしてみたらと思うのである。勿論その共通項の絶対性をにわかに信ずることは避けなくてはならないことはいうまでもないが。

では、敢て摘出されうる共鳴部分とは何かといえば、例えば仏教の理法にある輪廻転生の法則、無常無我の法、或いは慈悲感といったものであろうか。欧米のキリスト教文明にある絶対神信仰による契約思想は、いわば神なき仏教では稀薄であり、現に日本人にしろ東南アジアの人びとにしろ、空間的心情による事物の処理（阿吽の呼吸）を処世訓としているところが多く見受けられる。又キリスト教でいうアガペーに比べて、慈悲心は巾広い概念の領域をもってあり、これ又東南アジア・日本人の例えば自然に対する関わり合い等に於ける態度にも、欧米人と相違して、より共鳴する部分が、両者にあるのではないかと思われる。

細密なる比較文明学の研究は、私自身の今後の課題として、とにかく私がここでいいたいことは、日本人の欧米志向が、日本の歴史過程（特に近代の）からいって仕方がないことであるとしても、その志向が直ちに日本人の元来ある心情を根底から覆させてしまったことにはならぬ（この点かなり思い違いを日本人はしていると思えるのだが）、むしろ長い間に培かれた仏教的心情は、例え残滓となっても厳存するのである。そして、その部分で、東南アジアとの共鳴可能が考えられるのではないかということである。東南アジアを見る眼裡に、この部分の認識が必要なのではないかと思う。しかれば日本は東南アジアとは心情的親近感をもちやすい筈であり、又もたねばならないのである。敢て共鳴部分を自覚することは（東南アジアに接近することで再自覚されることもある）、不協和音の部分とそれによる理解不能の限界部分も見えてくることであり、東南アジアの正しい理解に役立つことであろう。

とはいえ次の如き『脱亜論』にも思い切って耳を藉さねばならない。福沢諭吉の『脱亜論』の立論、即ちアジアの国々の実態を否定的にみることによって脱亜をすすめたのと違って、むしろ「日本側に巢食している問題に

着目して」の『新・脱亜論』に。「……アジア世界の内在的固有論理にたいする感受性を培い、同時に、アジアにおける日本の文化的『共鳴』力の限界の見極めに成功するときまで、そしてアジアの国ぐにの発展に望ましい貢献ができるほんとうの自信がもてるときまで、日本はいさぎよく、アジア世界とのつきあいは断念すべきである。⁽²⁾」

アジアとりわけ東南アジアに対する悪しき『脱亜』の蓄積が、時代の流れの濾過器で幾分かは除去されたとはいえ、晴れて『断念』をやめにするには、まだまだ薄汚く根強くこびりついて、日本人の心に沈澱していることは残念乍ら認めざるをえない。⁽³⁾その蓄積部分を、醒めた感覚で、つめられるだけつめて除去していくことが、まさに今日の課題である。いい加減な、つまりセンチメンタルなエキゾチズムでの共感とヒューマニズムだけで、そして『近代の超克』の具としてだけみる自己文明批判だけで、そして又相手側の不可解な利害感の前に立ち往生して、仕方なく『心と心の触れ合い』を満面微笑して語りかけるような態度⁽⁴⁾での東南アジア理解・交流は厳に慎まなくてはならない。

例えば、日本の多くの人びとが抱いている東南アジア

(或いはアジア全般)についての偏見除去に努めることを、東南アジア接近へのつめの、ささやかな一歩とするならば、さしあたり次のような偏見イメージの除去とそれに対する課題と視点が考えられる。

(一) “遅れている東南アジア”というイメージの除去。
……“遅れている”という場合、それはいわゆる先進工業国に比べてということになるのだろうが、そもそも民族の文明度に優劣がつけられるものなのかどうか。⁽⁵⁾ 眼先の“文明”に幻惑され、その尺度だけで、東南アジアを窺てはならないということである。よくいわれるところだが、例えば東南アジアのあちこちにある遺跡文化群、或いは現在に続く食生活文化等、広範囲にわたって徹底的な究明が必要であらう。

(二) “非近代的東南アジア”というイメージの除去。

……(一)に関連することではあるが、とかく近代ヨーロッパのデモクラシー思想(体制)を金科玉条として、その視座からのみ東南アジア社会を眺めてしまっているところからくる“非近代的イメージ”化で、これとて、例えば東南アジアの村落共同体にある社会機能等を余りにも無視した考え方であるといえよう。私は何人も人類的“好奇心”からでのみ考えているのではなく、もっと積

極的な意味(或いは今日の意味、つまり先進国に左右されている現在の支配権力層の恣意に対抗するという意味で)をそこに関わらせて考えているのである。又、いうところの先進国が、東南アジアの“非近代性”の治療薬としてやたら“人権”⁽⁶⁾とか“平和”とか“自由”とか、はたまた“⁽⁷⁾革命”とかを輸出し、東南アジアの人種間反目を殊更煽り、その混乱、乱反射を利用し、いわば余計な御節介(しかも御節介しっぱなしの)をして、その“非近代性病”の治りの遅さに慨嘆してみせるが如き態度の大いなる改めが必要であらうということである。私も頻発しているが、“発展途上国”(部分的にはそうなのだろうが……、勿論それは先進国にも責任がある)のことは改めも、“先進国”ということばと共に、この際考えなくてはならない。

(三) “汚なく貧しく怠け者東南アジア”というイメージの除去。……おそらく東南アジアに対する多くの日本人の、若い層をも含めてもっているイメージであろうが、各々のマイナス・イメージは偏見と誤解から生じている。仮りにある部分について事実として認められるとしても、それは大部分かつての、そして現在の“植民地支配”の所産から生じているといえよう。少くともこの点の認識

のわきまえが必要である。衛生観念というものは、その民族の生理的生態系からも考えていかななくてはならないことなので、はたして汚ないかきれいかの判断は即座にみきわめられるものではない。「汚ない」に関連しての病気に對する先進国のイメージも、速断に偏する場合が、少なからず見受けられ、これが医療開発上、幾多の問題をかもしだしていることは周知の如くである。又、東南アジアに対するイメージの「貧しく怠情」は、イメージする側（先進国）が元來創出した部分も大いにあるのであって、ずいぶんと身勝手なイメージ・アップといわざるをえない。そもそも先進国は東南アジアが豊かで価値あるが故に眼をつけたのである。そして、自国の生活確保の権利・自由の享受の為に、その社会のごくありふれた民衆の生活のリズムを植民地支配によって狂わせたのである。かつ又今日先進国の思惑とそれに追隨する東南アジアの権力機構による「近代化された経済開発」が、例えば極貧村や大都会周辺のスラムを、結果として生じさせ、春をひさぐことに、むしろ「勤勉」を余儀なくさせられた人びとを、輩出させている。先進国側はその責任を「他者審判的でなく、自他教育的態度」⁽⁹⁾をもって知らなくてはならない（貧困の全ての原因が先進工業国に

ある、という極論には疑問視するとしても）。

以上（一）（三）についての偏見除去に関する課題と視点は、取り敢ず、ということなのであって、つめられる偏見、誤解は他にも多々あろう。ただおしなべて先進国の「悪さ加減」を強調し、奇妙に東南アジアにおもねたり、知らなくてはならない恥部に眼をそむけたり、先進国の貢献度（大概の場合先進国自身に立ち戻る貢献度としても）を、まるで無視してしまふことは、東南アジアへのシビアな理解とはならない。しかし先の「共鳴部分」の察知と相俟って、「偏見」の除去だけは、是非学校教育の場で大いになされなくてはならない。とかくそれは社会科学系の課題にだけ押しつけられる内容に判断されがちだが、私は他課題にも当然及んでいいことだし、又社会教育、家庭教育の場に於いて、少くとも東南アジアに関する以上の点の学習が施されなくてはならないと思う。そして偏見の除去（そうたやすくできるわけではないが）が、仮になされたとしても、実はそのドロドロした現実の前に、次の段階で何をどうなされるべきかを考えて、おそらく当惑と無力感だけが残る結果となるかもしれない。しかしその当惑・無力感こそ、現実には「遅れてしまわざるをえなかった（部分的にも）」東南アジアに対する理

解の糸口ともなる筈である。当惑せず、無力感からの見せかけの脱却を気安くさせるほど、東南アジアの現実は、甘くそして単純なものではない。真の当惑、無力感があってこそ、東南アジアを偏見・誤解なくして、わずかならでも見たという証しとなろう。その時初めて発展途上国東南アジアに対する協力とは何か、そして協力できないこととは何か、或いは協力してはならないこととは何か、そして例えば日本が東南アジアに協力されなくてはならないこと（物でも心でも）とは何かがはっきりしてくるように思える。そしてこのようなことは、つまりこのアブローチによる東南アジアへの理解・協力の方法は、他の地域の発展途上国理解にも応用できるのではないかと考える。

さて国際理解・途上国理解、そして東南アジア理解と地域的に視点を縮少し乍ら、その教育のあり方、掘り下げ方を問うてきた積りである。いずれの場合に於いても、つまり国際教育の対象座標がせばまっても、きめ細かな視座に立たねばならぬということ、座標軸のプラス・マイナス共の座標の相関性に充分なる配慮がなされねばならぬということ、そしてその相関函数に付着する点と線、つまり国家（為政者）と民衆との関係、特に民衆の繰り

出す拋物線に着目しなくてはならぬということはいうまでもない。

次に東南アジアの、特にインドシナ半島、しかもその半島のいくつかの場所に点在している「難民」の問題に的をしぼって、その国際理解の中でのあり方を、今まで述べてきたことと関連させ乍ら、そして私自身の「難民」との触れ合いの体験を踏まえて探っていきたいと思う。いわゆるインドシナ難民との小さな関わりをもつにいたって、私は実のところ、ここ数年来考察の対象としてきた国際理解教育のあり方を、かなりの部分で手をおしをしなくてはならない破目になってきており、弁解めくが、本稿の既述の部分にも暗中模索の箇所がいくつか露呈し、大変面映ゆい気持がしてならないのである。

世界の難民問題そのものについて記述することが本稿の目的ではないので、ここ十数年間の難民の動向については簡単に触れるだけにし、そのあと（章をあらためて）実際私が「難民」に接して感じ、考えたことを記していきたい。そしてその中でそれらを国際理解及びその教育のあり方と関連させ乍ら述べていきたい。

一九七〇年代以降だけに限ってみれば、七一年のバン

グラデシユ 独立にともなう東バキスタンからのインド領への難民の出現に始まり、アフリカ・ブルンジでは内戦によって、エチオピアでは同じく内戦によって、そしてウガンダではアミン大統領のアジア系民族の追放によって、ラテン・アメリカのチリでは政変によって、又アンゴラ、ギニア・ビザウ、モザンビークでは旧ポルトガル地域の独立にともなう、南アフリカ共和国ではアパルトヘイトによって、そして特に七五年以降のインドシナ半島では「解放」や「政変」によって、各々難民が故国（故郷）を追われ、いわば流浪の民となって他国に流出している。記述洩れの分も含め、現在世界ではおよそ一千万人の難民（半数はアフリカ地域の）が存在し、発展途上国にもそのうち約八百万人の難民がかかえられ、その地域は、難民の存在の重圧の為、経済が麻痺状態になっているありさまである。一九六七年にできた「難民事情に関する議定書」によると「難民」とは「人権・宗教・国籍・特定の政治姿勢又は社会組織への所属により迫害を受ける恐れが十分にあり、国外に逃れて自国の保護を受けられない、又はそうした恐れのため、保護を受けたがらない人びと」とされている。その他実際には自然災害、経済的理由によって難民化する人びと、或いは

少数民族で、国家の恣意によってやむなく流民化した人びとも含むようである。いずれも一応国連難民高等弁務官事務所（以下 UNHCR）¹⁰⁰ や、地域によるが、ユニセフの救援対象となっている。

インドシナ難民、特にタイに逃げてきた難民の数は、概算で約二十三万人（八一年五月現在。その後約三十万人位はタイ国外に）で、そのうち半数の十万人はベトナム人、ラオス人、旧カンボジア人で、各々主に七五年の「解放」後に、そして残り十三万人は七九年のクメール・ルージュ（ボル・ポト政権）の崩壊により親ベトナム派のヘン・サムリン政府出現後にタイに入ってきた新カンボジア難民である（必ずしもこれらの時期は明確ではなく、概ね、というところで）。その他タイ・カンボジア国境のボーダー・ライン上には、正式な（？）「難民」ではないが、約二十万人（八二年一月現在）が、「難民」として部落化して存在しており、主にユニセフが（八二年一月現在）救援活動をしている。ボーダー・ライン上の「難民」を含めてタイには約四十万人の難民が存在していることになり、それは大きく三種類に区分けされる。即ちラオス難民については、一応正式に「難民キャンプ」（タイ国内に八カ所）に、カンボジア、

ベトナム難民については、不法侵入者と見做され「ホルディング・センター」(六か所、以下難民キャンプとも記す)に各々収容され、前者はタイ政府の内務省が、後者はタイ陸軍の管轄下にある。そしてボーダー・ライン上にいるカンボジア人については、通称「難民村」(九か所、以下難民キャンプとも記す)の「難民」(正確には難民ではないが、以下難民とも記す)として扱われ(他のキャンプと違って、鉄条網に囲まれてはいない)いわば無法地帯の難民とされている。いずれの難民についても、国連機関の意向下にあるというよりは、タイ政府の胸三寸にあるといつてよい。世界の他地域の難民に比べれば、色々な点で(例えば救援物資の点等で)「めぐまれた」難民といわれるが、そのことが彼等難民の慰めとなることにはならないであろう(その他タイの北、いわゆる黄金の三角地帯へ即ちタイ・ラオス・ビルマ国境辺りにはビルマ難民の出入りがある)。又難民の第三国への移住(トランジット・センターとしてタイ国内に三か所、移住難民の為のキャンプがある)及び移住先の国々の受入れ状況については、新聞・テレビ等で種々報道されているところであり、本稿では、他の事柄の記述でそれらが関連しない限りは特に詳細には取り扱わない

ことにする。(各々のキャンプの数は、八一年十一月現在のもの。なおポート・ビープル、ランド・ビープル流入以前のベトナム難民の「正式」の難民キャンプが二か所、タイ国内にある。ボーダー・ライン上には国連機関がタッチしていない難民村が数か所ある。又、カンボジア難民は全てがタイに流入してきたとは限らず、ラオス、ベトナムにも約十万人、流出したともいわれる)

教場で、そしてその他の場で日頃国際理解教育の一端を、不遜乍ら披歴しているとはいえ、常に一種のもどかしさが漂い、自分自身はもとより、私に接している若者達にも、白々しい思いがあるにちがいない。そんな思いが、私をして、発展途上国のインドシナ難民に近づかせたのかもしれない。

過去一年半の間に、三回私はタイ国内、及び国境上の難民キャンプを訪ねた。第一回目に出かけたおりに、見るもの聞くもの、全て衝撃の対象であった。そして第二回目には、理解しえる部分としえない部分が、多少とも鮮明になってきた。しかし三回目、即ち八二年一月の訪問では理解しえる部分が雲散霧消してしまい、それでも一縷の望みが、もし少しでもあれば、一体それは何で

あろうか、いやひょっとして皆無ではなからうかの慨嘆につつまれ乍らもただひたすら焦躁感を抱いて、くに境重く彷徨っただけであつたが……

(1) 矢野暢「東南アジア世界の論理」(中央公論社・一九八〇年)八五ページ参照。

(2) 前掲書、一三〇ページ参照。

(3) 「高校生のアジア認識」(日本ユネスコ協会連盟「アジア理解のために」所収・一九七四年)五ページ以下、「アジアのイメージ」(国際教育フォーラム「高校生の平和認識」所収・一九八〇年)五四ページ以下参照。

(4) 村井吉敬「スンダ生活誌——変動のインドネシア社会」(日本放送出版協会・一九七八年)六ページ参照。

(5) 小泉充雄・村上公敏「東南アジア——ぼくらの隣人たち」(筑摩書房・一九七六年)一五八ページ以下参照。

(6) 鶴見良行「アジア諸国における人権」(平和学会編「平和と人権」所収、早大出版部・一九七九年)二〇九ページ以下参照。

(7) 前掲「東南アジア——ぼくらの隣人たち」二〇八

ページ以下参照。

(8) 前掲「東南アジア世界の論理」一二八ページ参照。

(9) 久野収「戦後民主主義」(毎日新聞社・一九七九年)四九ページ参照。

(10) 難民問題の詳細については「一九七〇年代の難民」(UNHCR駐日事務所・一九八一年)、梁敏子「八〇年代と難民問題」(国際理解教育研究所「国際理解」八十三号・一九八一年V所収)参照。

(11) インドシナ難民の逃避行、並びにタイ国流入期の「悲劇的狀況」については、多くの著作、写真集があるが、ここでは次の二冊だけ紹介しておきたい。園田矢「インドシナからの報告」(日本放送出版協会・一九八一年)、池原征夫「戦火・自由そして死」(技術と人間・一九八二年)

(12) 一九八〇年八月、「国際教育フォーラム」企画の「難民キャンプ訪問」の一員として。高校教員と高校生、大学生等参加。国際教育フォーラム「国際教育フォーラム」八八号・一九八〇年Vに報告書が。

(13) 一九八一年三月、「全国高等学校ユネスコ活動指導者協議会」主催の「アジア研修講座」の一員として。高校教員、高校生参加。「ユネスコ新聞」(日本ユネ

スコ協会連盟) 一九八一年六月一日号に研修記が、又「読売新聞」(夕刊) 一九八一年四月九日(十七日号)に江本嘉伸記者によるそのおりの随行記が各々掲載されている。

四 渦巻くメコン

— 一九八二年一月某日・日誌より

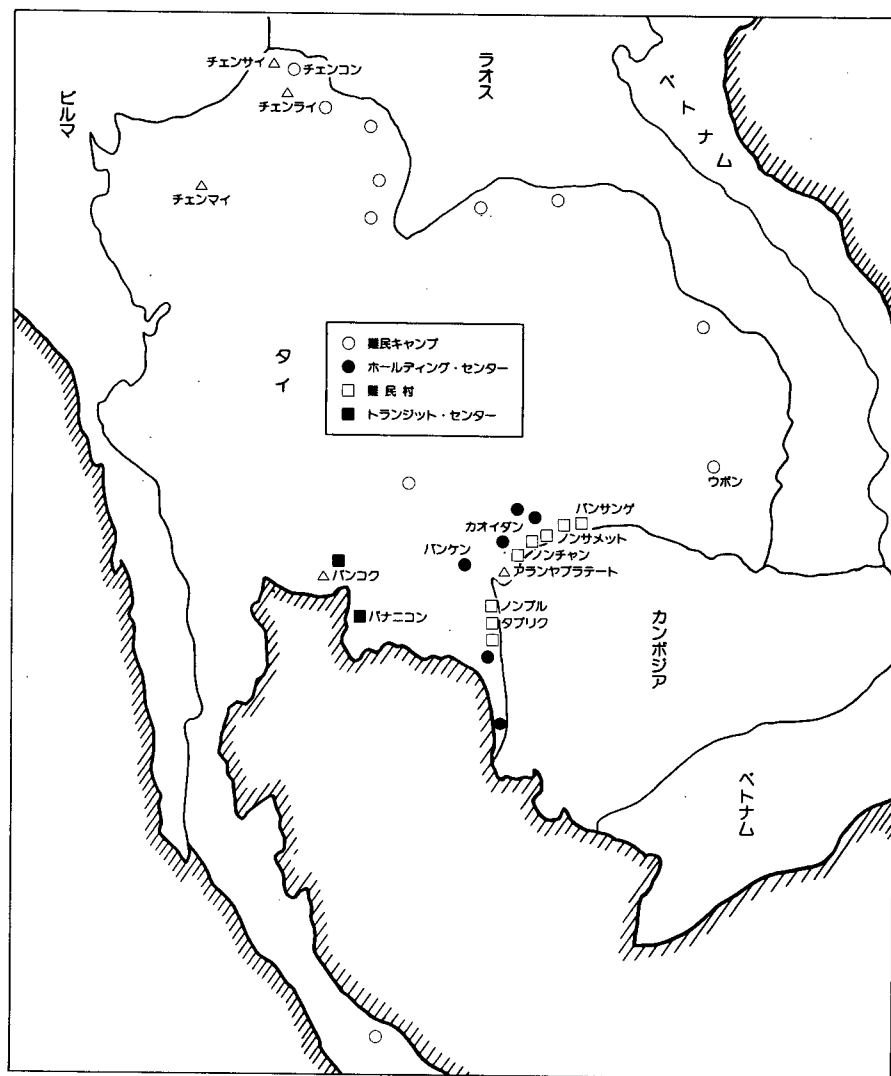
猛烈なる土煙をもうもうとあげて、フロント以外になぜか全くガラスのないワゴン車は、おそらく雨季であつたならば相当ぬかるむであろう道を、かなりのスピードをあげ、メコン川に沿って、バウンドを繰り返して走つた。車は突然止まり、私は抛り出されるようにして車外にでた。国境がそこにあつた。タイ・ラオスそしてビルマ三国の国境地点である。いわゆる黄金の三角地帯の東寄りのこの付近は、タイの北端の町チェンサイより約六キロ西方に位置し、メコン川と小さな支流の合流点である。私が立っている場所はタイで、眼の前の支流とメコンの合流地点であるデルタ状の河岸はビルマ、そしてメコン川の対岸はラオスといった具合である。包みより取り出したカメラの小さな覗き穴から眺めると、がっばり三か国が入ってしまふ。そしてそれは、まるで国境を

感じさせない、ごく普通の自然の風景なのである。馬鹿馬鹿しいほど当たり前のことの筈なのに、それを不思議に思うことに、一種の思惟のいらだちを覚える。流れの合流部分に可愛らしいほどの渦が巻いていたが、私の脳裡には、乱調気味の渦が乱れ始めてきた。

メコン川は、チベットにその源を発し、いくつかの山系を南下、雲南そしてラオス・タイ国境を流れ、カンボジアを通過し、ベトナム南部デルタ地帯より南シナ海に注がれる大河であることはいまさらいうまでもない。数か国の国境を越え、国境沿いに流れているこの川は、多くの民衆の生活を豊かにさせたであろうが、又悲劇の舞台でもあつた。しかし今この川は、そんなことを意に介さず、泥を含み乍らも、かなりの速さで、しかもゆつたりとおおらかに黙って流れていた。一月初旬とはいえ、初夏を感じさせる陽ざしと山々の緑の燦めきが、……鳥が軽くさえずった。近くの支流で青年が釣をし、老人が合掌し乍ら水浴びをしていた。付近の畑ではタバコの葉がそよ風にゆれていた(それとなく捜していたケシの白い花は、どこにも見あたらなかった)。子供達が七、八人、廃棄されたボロ船で遊んでいたが、ふと気がつくといビルマに上陸していた。メコン対岸のラオスの家にひと

タイ国内及びその周辺の難民のキャンプ所在地

(地名を記した所在地は私が訪ねた場所)



筋の煙が、ゆらりゆらりとほっていた。のどかである。兵隊も警官も、その姿は見えなかった。

私がくに境に^{さかい}立つて、いくらかでも緊張感を抱いているとすれば、それは余りにも今まで「地図」の上で国境というものを観念的に意識し過ぎていたからではないのか。地図上の、あの赤い点線に疑いもなく幻惑され、国とか国家とか領土とか主権とかを必要以上に気にし過ぎていたのではないのか。この一月（一九八二年）、私はシンガポールとマレーシア、又マレーシアとタイの、そしてタイとカンボジアの国境に立つて、いやかつて経験したが、オーストリアとイタリーの、東西ドイツの、そして私はまだそこに立つたことがないが、南北朝鮮の……各々の国境に立つた時、もしそこに出入国管理官や兵隊や警官が、そして柵や白い国境線がなかったら、私が今、悠久と流れるメコンとその付近の自然によってかもしだされているものによって感じている不可思議な、国境に対する感覚を同じようにつたし、又もつてあらう。地図上に例え国境があっても、その国境にあたる現実の場では、国境などは本来意識され、気にされるものではない。川とか丘とか山とか、そして海とか平野でさえが、よく地図の上での国境とされるが、元来それら自

然は、そこに或いはその周辺にいる民衆の共有物であり、又共有の場であり、「さかい」という概念は彼等にはなかった筈であつたし、実は現在でもない筈である（カメラの覗き穴から眺めた景色に国境による色別がないように）。

しかし実際には地図上に画かれた国境によって、眼に見えない国境が厳然として存在しているのであり、その周辺の民衆の意志とは無関係に、民衆は強く国境を意識せざるをえないばかりではなく、民衆の正常なる生活のリズムは乱され、そして無意味な犠牲をしいられる結果になつてしまふのである。

では強引にも国境の線引きをしているのは一体何ものであるか。流れゆくメコンや緑なす山河を眺めていて私が感じるのであるが、それはこのくに^{きこ}境地点より距離的にも、人間関係の上でも、はるか遠く離れて存在している為政者といわれる一群なのであり、そしてその一群に陰に陽に連携している、もっともつとはるかに離れて存在している先進大国の為政者の思惑なのではないのかと思うのである。「民衆の為」と称し、ただ壁に貼つてある地図を、薄ら笑いさえ浮べて眺め乍ら、勝手な線引きが行われているのではないか、山河の発する匂い

とか、織りなす民衆の人情とかをまるで無視して。自由にメコン川を往来していた、ごく普通の民衆が、ある日突然、一通の指令書により、不法侵入者として或いは難民として取り扱われてしまい、しかも肉親とも引き離されてしまうことに、それは仕方のないことだと噓ぶかれてしまつてよいことなのであるうか。

為政者及びそれにまといつく大国の領土（勢力）陣取りごっこは、えてして観念でしか国境について意識していない、国境から離れて生活している民衆には受け入れやすい遊びごとと映っているものであり、為政者側としては、その民衆のそうした関心をますます煽りたて、外敵意識を助成、つまりは己れの内政不策を隠蔽したり、支配権力維持にその“民衆の意識”を利用してゐるのではなからうか。その結果もともと国境意識に稀薄だったくに境の民衆のみ、犠牲がしいられてしまうのではないか。日本人は、周囲を海に囲まれ、国境については鈍感とされていて、それゆえに国防意識が薄いと批難され（国内外から）、国家意識を無理にも煽りたて、防衛準備の正当化がはかられているようにみえる。そして残念乍ら、この“正論”は、現代の多くの若者達にも受けいれやすいところなのである。実は国境について鈍感であるので

はなく、観念的には大変敏感なのであり（陣取りごっこの郷愁？）、北方領土問題などは、かっこうの為政者の政策支配の具といえる。私にはやはり現実的に、国境については、鈍感である方が、特にくに境沿いに住む民衆を思う時、必要な考え方のように感じられるし、もし日本人が“鈍感”であるならば、これはますます伸ばすべき民族性としなくてはならないように思える。

……私は同行の三人に促されて再びワゴン車に乗り、くに境をあとにした。

同行のひとりには UNHCR のオフィサー・S さんで、今回に限らず過去二回の時もそうだったが、難民キャンプ内への訪問の為に、タイ内務省、陸軍に接触して便宜をはかって貰った。彼は両親がカンボジア人（クメール人）で、本人はタイ国籍をもち、アメリカの大学への留学体験もある人である。又 H さんは、バンコクにある JVC（日本ボランティア・センター）の事務局長で、かつて青年海外協力隊員としてラオス農村で働いていた経験をもつ人で、ラオスの話し、或いはキャンプ内での JVC ボランティアの活躍ぶり等を話して貰った。彼女と国境の町チェンライの市場を歩いたが、その時その市

場で売られている食べ物、ラオス食物文化の影響下にあることを彼女によって教えられた。もうひとりのYさんは、ずうっと日本から一緒に、日本ユネスコ協会連盟のスタッフで、難民に対するユネスコ（本部はパリ）の教育援助の重要な窓口的存在である。彼は、難民の子供達が描いたクレイヨン画とコメントを載せた本の出版を企画・実行し、日本のみならず世界各国で、その本は反響を呼んだ。今回そして過去二回とも各地域の難民キャンプ訪問には、ひとかたならぬ御世話をしていただいた人である。

チェンサイからメコン川に沿って約六〇キロ東に行く、と、チェンコンというタイ北部では一番大きな町があり、周囲はゆるやかな山岳地帯になっている。その町はずれにラオス人、特にラオスの山岳民族の難民の為にキャンプがある。タイ内務省の管轄下にあるこのキャンプの入口には、従って軍隊ではなく警官が監視にあたっていた。鉄条網の中には他のラオス人難民キャンプと比較して数少ない約五六〇人の難民が収容されていた。我々四人は、ボランティア・グループ、ワールド・ビジョンの若いタイ人スタッフの案内でキャンプ内を巡った。入口付近には六か月ほど前に建てられたという図書館（約二十

メートル平方）があった。本造建てのこの民芸風の図書館は、他の難民の人達の家々（大抵はニッパシと竹とで作られた粗末な小屋風の家々であったが）と比べ、頗る立派に見えた。この図書館は、ユネスコ・コアクシ
ン⁽¹⁾募金で建てられたものである。現在九百冊の本がおさめられているということだが、平均一日七十人の難民によって利用されているそうである。閲覧机ではおから数人の子供達が、勿論ラオス語で書かれている本だが、熱心に読んでいた。キャンプ内には学校があり、一応小学校五年制のシステムがとられている。丁度その日は土曜日だったので（つまり五日制）、誰もいない木造建てのつめ込み教室（机・椅子はかなりひどいものであった）を見るだけであった。JVCの若いスタッフは、ここでは自動車修理工訓練、及び漢方薬（Traditional Medicine）の開発を難民の人達を対象に、やっているとのことだった。

このキャンプ全体の雰囲気は、入口付近の鉄条網さえ見えなければ、もうずうっと前から存在している片田舎の村という感じであった（一九七五年に開設）。難民の住居は決して立派なものだとはいえないが、必ずしも画一的に並べさせられて建っているわけではない。細い土の路

は、曲りくねっており、ゆるやかな山岳地帯のせいもあり、坂道などもあり、自然村の様相を呈していた。小川があり、畑があり、小さな店があり、そしてそれらを囲むように、南国特有のヤシ類の木々が情緒豊かに包んでいた。キャンプのはずれの川では、女の人がつつましやかに水浴びをし、他の女性ははでやかな色調の衣を洗っていた。のどかさにおいては、私が三か国の、あのかに境の地点で感じていたものと同様な状況であった。メオ族、ヤオ族、ランテン族、そしてクイ族等の山岳民族の人びとが、少くとも外見では和やかに共存しているようだった。白っぽい卵形の顔をしたメオ族の女性の多くは、頭に黒いターバン(?)を巻き、原色の毛糸を器用に操り、刺繍に余念がなかった。その刺繍に施された衣類に身を包まれた赤ん坊が、ちゃんとこれ又刺繍された帽子をかぶって、若い男の人に負われていた。可愛らしい女の子が水道(井戸からの)の蛇口の前で水汲みの順番を待っていた。ひとりの老人が麻薬を、大きな麻薬水器(?)をもって吸っていた。許可さえ貰えばチェンコンの町まで出かけられるとも聞いた。どうみても難民キャンプのムードではなかった。同行のHさんの通訳で、ある初老の男性の静かな口調での次のようなことばを聞いた。

でも、にわかに信じられなかった。「はじめアメリカへの移住を考えたが、既にアメリカに出ていった知人からの手紙で、決して暮らしがままならないということを知って、外国に行く気はしません。とにかく早くラオスに帰りたいです。だって山の生活は自由ですからね」

タイの貧村のたたずまいをこれまで見てきたが、このキャンプの方がよっぽど恵まれているように私は感じた。鉄条網を出た時、難民キャンプから重い気持を抱き乍ら出てきたというよりは、民俗学の宝庫に、うしろ髪をひかれる思いで、たち去ったというのが実感だった。

しかし難民キャンプから車(白タクを利用)で数分した所に、まだキャンプにも入れないラオス難民の仮収容所があったが、その収容所のある、ある公機関の建物の庭の片隅で、私はそれまで抱いていた甘ったるい気持が、急激に一扫されるような小さなできごとがあった。それは確かに大したことではなかったのだが、私自身には大変な衝撃であった。その時までバトミントンで遊び興じていたピストルをもったタイの警官が、小じんまり密集していた仮収容所の辺りを歩いていて私を見とがめるや、急に小走りに近づいてきて、鋭い眼差しを示し乍ら何やら厳しい口調でしゃべり始めたのである。少し離れてい

た所にいた U N H C R の S さんが近寄り、その場を取りなしてくれて、ことは何もなく終ったのであるが、私には ショッキング なできごとであった。難民 キャンプの中の人びとの微笑とあののどかな雰囲気、私は難民の人達の奥底にあるやるせなさを忘れかけていた。しかし考えてみれば、彼等はやはり難民なのであり、不本意乍ら他国にあって、他国の監視下におかれ、その自由を束縛されている人びとなのである。例えばビストルとはいえ、その銃口は常に彼等に向けられていることを、彼等はいやという程知っている。しかも彼等難民は他国の警官や軍隊の銃口のみならず、故国の「銃口」にも脅えているのであり、であればこそ難民化を余儀なくされているのである。特にラオス難民のうちでも山岳民族の彼等は、かつてラオスにピエンチャン右派政権が権力を握っていた頃、「解放軍」であるバテト・ラオ（愛国戦線）に対し、アメリカ軍のあと押してその山岳ゲリラ・テクニクを利用され、戦わされた事情もあって、七五年「解放」後には、利敵行為者の烙印が押され、ラオスの山岳から追い出される形で、止むなくメコン川を渡ってタイに流入してきた人びとなのである。いわば政争と大国の思惑の犠牲になったというべき人びとなのである。

チェンコンからチェンライへの暗黒の夜道の車の中で、私は悪寒（實際風邪をひいてはいたが）をとまった黒い渦巻きに、頭が異様に重かった。そして難民キャンプでのあの初老の人の話しが、今後は鮮明度を加え、真実味をもって耳に甦ってきた。

(1) ユネスコ・コーアクション……(UNESCO Co-Action, Cooperative Action の略)……「アクション」とは、途上国の開発の為に途上国と先進国とが共に手を携えて協力して行動するという意味で、ユネスコの公式事業のひとつである。日本でも一九六九年からユネスコ国内委員会並びに日本学術振興会の協力の下に、日本ユネスコ協会連盟が窓口団体となって実施している事業である。事業の一環として募金活動をし、その募金をユネスコが対象事業としてあげている世界約三十か国の五十事業に、募金者の指定希望によって送金（ユナム券で——UNDM, UNESCO Unit of Money の略。一ユナム＝一ドル）している。主にユネスコの性質上、教育関係援助が多い。

五 柵の中と外

同じラオス難民でも、チェンコンを含めたタイ北部の

難民キャンプに收容されている難民と、ウボン等タイ東部のキャンプにいる難民とは、そのラオス流出要因に相違がある。前者はどちらかという政治的要因からの流出だが、後者の場合は経済的側面が強い。ラオスの首都ビエンチャンでかつて勢力的であった中国系ラオス人は、一九七五年の「解放」（社会主義化）後、財産の私有が認められず、かつ又政治的立場も失い、タイに流入してきた。従って一応資本主義経済体制をとるタイとしては、前者をも含めてラオス人のタイ同化政策を少くとも最初のうちは試みて（タイ語教育の実施、タイ王室の写真の掲額義務等。ただ今年あたりから、同化政策については、変化がみられ、ラオス帰還を促しているともみられる）、内務省管理の難民キャンプを設けたのである。しかし、特に七五年初頭よりのカンボジア難民の多量タイ流入に関しては、タイとしては国境に追い返す方針をとった。もともと「難民条約」を批准していないタイでもあったし、東南アジアの中でいくら安定した国だといっても、国民所得の数字が示すように発展途上国にはちがいがなかった。多量の難民をかかえるだけの余裕は当然なかった。しかし国際世論に押されたことと国連機関からの資金援助の提供があるということで、カンボジア

難民（或いはその後続々と流入してきたベトナム難民）を受け入れることになった。但しそれはあくまでも不法侵入者として取り扱い、一時收容の形で受け入れということであり、内務省ではなく陸軍の管轄下になったのである。カオイダン・キャンプとかサケオ・キャンプ（その後移転されサケオⅡとかバンケン・キャンプと呼ばれている。本稿ではバンケンの名を使用）等はその時設置された。又その後キャンプ收容者の中には第三国移住希望者（中国人系が比較的多い）が増え、トランジット・センターとしてタイ国内にはバナニコン等三か所にキャンプが設置され、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の下でタイ国外に移住がはかられている（ここで忘れてならないことはキャンプ設置にともない、キャンプ周辺のタイ農民が何らかの圧迫を受けているということである）。

タイ政府は八十年半ば頃から、カンボジア難民の受け入れを中止したが、その為タイ・カンボジアのボーダー・ライン上に、難民村が次々と出現した。そこに輩出された難民は、おおよその分類をすると、ベトナム軍の力添えによるヘン・サムリン政権に追われたクメール・ルージュ（民主カンボジア、いわゆるボル・ポト政権派）、

七五年の「解放」前の右派ロン・ノル政権のソン・サン（元首相）ひきいるクメール・セリカ（解放クメール、人民民族解放戦線）、そしてクメール・セレー（自由クメール、一派としてまとめることはできない。現在では、はっきりその存在はつかめない）という三派の勢力下にある難民達で、その移動は八十年、八十一年には激しく、一応この機関の監視もない、一種の無法地帯の人びとである。一口に難民といっても、おしなべて同一視することとはできず、難民問題理解の場合でもきめ細かく類別しておく必要がある。

さてもう少し彼等難民を大きく取り巻く国際状況を顧みると、八十年、八十一年の国連総会の決議では、ボル・ポト政権をカンボジアの正式な政府として承認しているのであり、ヘン・サムリン政権はベトナムの傀儡政府として認めてはいない。だからといって、例えばアメリカ等いわゆる西側諸国が共產主義政策をかがけ、かつ残虐の限りを尽したといわれるボル・ポト政権を喜んで支持しているかといえ、それは決して本意ではなく、ただヘン・サムリン政権の背後にあるベトナムないしはソ連に対抗する意味で、止むなくボル・ポト支持にまわっているに過ぎないというのが現実であろう。未確認の情

報では、中国はソ連への対抗上、ボル・ポト派に武器輸出をしているといわれるし、又アメリカは、勢力が小さいとはいえ、ソン・サン派に援助を差しのべているともいわれる。そしてタイはかなりの危険を冒しても（現に危険状態にあるが、タイ国民の内政を見る眼を外にそらすという効果も狙って）、ベトナム勢力侵入の防波堤としてボル・ポト政権の支持を装い、ボル・ポト派その他の「難民」をボーダー・ラインに置きとどめておくことを政策上とっているといったふしも感じられる。

又タイを含めた ASEAN（東南アジア諸国連合）諸国は、多少内部にずれはあっても、ベトナム勢力（社会主義勢力）浸透の危機感を各国が各々抱き（名目上はカンボジア和平）、反ベトナム勢力として、ボル・ポト派、ソン・サン派（及び右派ゲリラ組織）そしてかつてのカンボジア国家元首のシアヌーク派による三派連合政府の設立への話し合いを促し、国連の場にもその問題を持ち込んでいく。しかし、世界に共產主義政策の放棄を喧伝したとはいえ、ボル・ポト派としては、そうおいそれと他の二派との結びつきに賛同を示しているわけではないし、又他の二派にしてもボル・ポト派との連合にはそう簡単には組みしえないであろう。

一方ベトナム本国では、南北における政治的統一の微妙な亀裂があり、経済的重圧による皮弊からヘン・サムリン政権への援助も、必ずしもままならず、又カンボジアに駐屯しているベトナム兵の志気も喪失しがちであると伝えられている。そしてそのベトナムに武器・物資の援助をしているソ連にしても、それがソ連国内の経済を圧迫している一因ともいわれている。ソ連に対抗しているアメリカは、ベトナムからの難民流入を、（実際は難民受け入れを縮小しているにも関わらず）自国の宣伝とベトナム攪乱の材料として使っているともいわれる。当のヘン・サムリン政権は既に総選挙、党大会、国会召集という段階を踏み、自派の力の誇示と勢力拡大を狙ってベトナム軍に助けられ乍ら、タイ国境に屯ろしているボル・ポト派に攻撃をしかけ、民心を自派につなげておこうとしているようだ。

タイ・カンボジア国境のボーダー・ライン上の硝煙臭い無法地帯には、こうした国際情勢の縮図として、目下ボル・ポト派、ソン・サン派（及びシアヌーク派）の難民が存在し、国際機関の援助とは別に、各国の利害関係により、人と物が暗躍しているように見受けられる。加えて一部タイ軍部と結ばれたタイ商人のヤミ・ルートと

して難民村は重要な基地であり、本来バンコクあたりにある筈の日本のラジ・カセが、カンボジアを経てホーチミン市で売られているといった具合であり、政治的錯綜をよそに、或いはそれを利用して、そのしたたかな商魂が徘徊している状況のようである。

いわば柵の中（眼に見えない柵も含めて）におし込められた難民の柵の外の政治の力関係は概ね以上の如くであるが（一九八二年二月現在までの状況）、これらの情報については既に新聞、テレビ等で報じられているところであり、目新しい内容として、ここでわざわざ述べたわけではない。柵の外の政治的背景に関する、より緻密な真相を探究することが必ずしも本稿の目的ではないのであって、私がここで書きとどめておかなくてはならないこと、つまり私が関心を抱くことは、そして多くの人がびとが真の国際理解を目指し、関心をもつて貰いたいことは、そうした政治の動向に、ただひたすら引きづられ、完全に無機物的物体とさせられた、くに境（きまり）の難民の生きたなりわいについてである。

たった三回の難民キャンプ入りで、しかも短時間でしか私が観られなかった「難民」の実態は、到底彼等の実際の生きざまからすれば、微々たる範囲のものであるか

もしれないが、以下難民の様相の一端を、ここで紹介しておきたい（なお私が訪ねた「キャンプ」は、ラオス難民が收容されているウボン、チェンコンの難民キャンプ、カンボジア（ベトナム）難民がいるカオイダン、バンケンのホールディング・センター、トランジット・センターのバナニコン・キャンプ、そしてタイ・カンボジア国境上の五か所の難民村である）。

いずれのキャンプとも、栄養失調と病魔に襲われた瘦身の一群が彷徨っているという状況は、まずないといつてよい。これは国連機関の物質的援助と医療活動そして各国のボランティアの活躍の功績に負うところが多いといえよう。

カオイダン・キャンプを例にとると、約三キロ平方の土地に約四万三千人の難民が收容されているが（八〇年前半には約十四万人）、当然乍ら人口密度はきわめて高い。公の機関の建物以外は、大抵はヤシの葉と竹でつくられた小屋という感じの家屋で、それらが画一的に並び建てられている（バンケンでは安っぽいプレハブによる長屋形式の建物が約十世帯のかたまりで、やはり画一的に並べ建てられている。熱帯地方ではおそらく寝ぎにくい建物ではないかと思われる）。難民村の場合は、柵が

ないし、国家による統制がないので、密集的とはいえないし、区画整理された建物配置ではない（もっともカンボジア領内の奥地にまで入ることが許されないので全体像はつかめない）。キャンプ内に入つて外見上、多少の異状な雰囲気は感じて、一瞬そこが難民收容所であることを忘れるといった感触はある。しかし道（？）行く人びとを見ていると確におかしい。休暇日（実際そんなものはないが）でもないのに、やたら若い働き盛りの男性が何もせずブラブラしている。タイ政府により原則としてキャンプ内で働き、収入を得ることは、定住化を避ける為にも（特にホールディング・センターの場合）禁じられているのである。

私が初めてキャンプを訪ねた一九八〇年八月に比べると、二回目の八一年四月、三回目の八二年一月と、約一年半の間に、ずいぶん変化した部分もある。家屋の周囲に小さい乍らも畑をつくり、野菜を栽培している家が多くなったこと。小さな女の子の外国人目当ての、カンボジア紙幣売りに始まって、自家製の菓子を路端で売る者おそらくタイ商人から何らかの手だてで得たものであるう日用雑貨を売る者があちこちに現われたこと、タイ政府の政策の変化か、小規模乍ら市場すらあった。以前か

らあったのかもしれないが、たち並ぶ家屋の一角に、寺（仏式）があり、読経が聞こえてきたりもした。こうした変化を見ていると、キャンプ内での定住化が根につき始めてきたのではないかというのを感じたのだが、私にはその定住化が、どうしようもない「柵の外」の状況に対する難民達の一種のかほそい開きなおりのようにもみえ、定住化は逆に難民達の慢性的な不安感の定着化にも思えた。

トランジット・センターであるバナニコン・キャンプ（一般難民も約半分は收容されているが）の場合は、第三国への移住が定まった難民の收容のせい、キャンプ内にはスーパーマーケット、食堂すらあり、心なしか若者達にしても活気を帯びていた。他のキャンプに比べ家屋のつくりも立派でテレビアンテナが立っている家もあった。ここではタイ流入前の故国での所得の差が如実に表われ（服装の違いとか、スーパードの買ひものの仕方、解るのだが）、大分貧富の差があるように感じる。しかし既に海外に移住した者の移住先での生活体験の情報を知っている「柵の外」にいる私には、彼等の一見明るそうな顔に複雑な気持を抱いた。

難民のうちで第三国移住を希望している人びとは、中

国人系か、いわゆる知識階級に比較的多い。国外での知己の存在、或いは語学教養があるということで、外国人（特に先進国の）との接触機会が多いからであろうか。長い眼でみた場合、はたして実際国外に出られた人びとが幸せであるかどうかは、にわかには解らないまでも、少くとも現状の難民の中では恵まれた人びとのように思える。しかし自国語しか語れない、そして学歴も高くない、或いはまるで無い圧倒的多数の難民（おそらく農民が多いと思うが）にとっては、国外移住への希望すら口出すことができず、かといって帰還についてもままならず、結局のところタイ国内定住化を余儀なくさせられている状態をしいられているわけである。故国の山河を思う気持や故国での人間関係を今断ち切れ、先き行きの不安がますます募ってきているのである。タイ流入直後の恐怖と不安感、或いは現在ぬぐいさられているかもしれないが、それはあくまでも一時のやすらぎでしかない、むしろ新たな不安と悲愴感がこれからますます増えていくのではないかと思う。特にボーダー・ライン上の行き場のない難民にしてみれば、「柵の外」の錯綜した状況変化をもろに受け、悲劇的現実がめまぐるしく彼等の眼前に展開されていくわけである。

しかし実のところ私はキャンプの上っ面しか見ていないし、又見ることができない。難民の人達が何を考え、

何に思い悩んでいるのか、到底はかりしれない。実際夜の帷のおりたキャンプを私は知らない（タイ軍によって外国人は全て追い出されてしまう）。殆ど光らしい光のない夜のキャンプを想像した時、何か昼間と全然違ったキャンプがそこに存在しているように思える。タイの兵隊による凌辱、タイの兵隊との金のやりとり等は、難民の人達から直接聞いた話でもある。夜の静寂の中で思ひ出すであろう、ついこの前あった逃避行の苦しさで肉親を失った悲しさ、そして前途に横たわる不安。それに加えて難民同志のいがみ合いと猜疑と裏切り。明日の運命が全てタイ軍、そしてそれを囲む政治の力関係に委ねられているということ。全くごく普通の生活（例えばそれが苦しくとも）をしていた民衆が、政治の壁の前で知ることのできない。そればかりか、ひとりひとりの人間の生きるということの大きさを感じた時、そして私自身の力を顧みた時、私は気の遠くなるような絶望感にさいなまれた。

私のこのやるせない気持をますます証したてるような

三人のクメール人とその周りを取り囲む難民達について少々触れたい。

(一) Vさんのこと

Vさんは我々（日本ユネスコ協会連盟のYさんと私）が今年（一九八二年一月）タイ・カンボジア国境の難民キャンプを訪ねた時、バンコクから同行した三二才になるクメール人である。彼は農村出身であったが、プノンペンで高校まで学んでエンジニアになった。しかしロン・ノル政権崩壊後登場した波尔・ポト派の過酷な施策に抗って、結局故国にいられず、七六年に妹を残して家族と密林を通過してタイ国境に逃れた。しかし母は餓死、家族はばらばらになった。Vさんは波尔・ポト政権下で強制離婚をさせられており（子供がいるにも関わらず）、しかもその後別れさせられた夫婦各々が、新たに別の者と強制結婚させられた。彼はひとりでタイの国境の町アランヤプラテートに潜入、そこでタイ警察に捕縛されたが、彼の持ち前の果敢な熱意と努力でバンコクに移り、UNHCRに勤めることとさえてきた。その後オーストラリアへの移住を定め、既に同国の市民権を得て、目下豪空軍の整備工として働いているとのことである。他のカンボジア難民に比べれば、少くとも表向きは大変恵まれ

た状況だといえる。しかしVさんの故国に対する郷愁と愛着は当然乍ら捨て難く、又家族（とりわけ元の奥さん、そして子供）の安否を気づかう気持は全く変わらず、今回オーストラリアのボランティア・グループのうしろ立てもあつて（又UNHCRの口添えもあつて）『難民キャンプ』を訪れたのであつた。

Vさんはキャンプに行くまでの車の中で、カンボジアの自然資源の豊富さを我々に語り、その資源と日本の技術との相互貿易による友好関係を、クセのある英語でまくしたてた。「あと二年で私は絶対にカンボジアに帰る」ともいった。悲運にあり乍らもそれを乗り越えていこうとする彼の熱い前向きの姿勢に、私は胸をうたれた。同時に、Vさんの恒間見せる妙に卑屈な挙動に、彼の境遇と政治の壁の圧力にうちひしがられたのであらう彼のここ数年の生きざまを思つて重い気持にもなつた。

彼はバナニコンやバンケン・キャンプで勢力的に動き廻り、彼の親族、知人の消息を尋ねていた。そしてバンケン内で、小学校の先生をしていた彼の元の奥さんとその子供に六年ぶりに再会した。奥さんはひとを憚らず、Vさんの胸の中で号泣して肩を震わせていた。彼等親子の間にあつた六年間の苦悩を思つて私も眼が熱くなつた。

キャンプの閉門時刻を気にしていたVさんは、何やら色々な品物が入っているビニール袋と現金（それはかなりの大金であつた）を薄暗い家の中に投げ出すように置くと、我々に向つて何ともいえない視線を投げかけ、「サンキュー、レッツ・ゴー」と静かにいった。我々の周りには、彼の奥さんと強制結婚をさせられた夫（行方は不明）との間にできた小さな女の子も含めて、多勢の難民が続々と取り巻いた（その一群の中に、松葉校の少年が何人かいたのが気になつた）。そして彼等は再会の親子と我々をじいっと見ていた。私はその視線に、いたたまれない気持になつた。再び車の中のひととなつた時、Vさんは暫く車窓の移り行く風景を虚ろに眺めて黙っていた（Vさんはオーストラリアに奥さんと『二人の子供』を引き取りたいとのことであつたが、豪政府は、正式な妻と子ではないとして、拒否されているそうである）。

（二）Mさんのこと

Mさんは、おそらくカンボジアでは裕福な家庭の中で過していたと思われる。しかし彼女がアメリカ留学中に（一九七四年から留学）、ボル・ポト政権下で両親は殺され、帰国の望みが絶たれ、アメリカ市民権をとつた。彼女は、大学院まで進み、ソーシャル・ワークを学び、

大学院修了後、直ちにボランティア組織の I R C (国際救援委員会) に応募し、カンボジアの「難民キャンプ」にボランティアとして派遣された。日ユ協連の Yさんと

私は、ソン・サン派の中心地といわれるバンサングの難民村やカオイダンのホールディング・センターで M さんに案内されて、その「キャンプ」内を歩いた。彼女は特にキャンプ内の教育関係の仕事をしていた。故国カンボジアの人びとの、異国での痛みと悲しみを分かち合おうとした。彼女は一応アメリカがバックアップするソン・サン派の中でも働いてはいたが、決して彼等一派がカンボジア民衆にとって救いになるとは信じていないようだった。共產主義を放棄したというボル・ポト派にも、そして人氣は未だにあるといわれるシアヌークにも強い不信感をもっていた。これまでの為政者の権力腐敗を静かな口調ではあるが、強く批判した。勿論、ベトナムに支持されたヘン・サムリン政権も非難の対象でしかなかった。前途にむしろ絶望しかないカンボジアの現状を顧み乍ら M さんは、黙々と仕事をしていた。

彼女のそこはかとなくにじみ出る憂愁のもうひとつの原因は、彼女のボランティア仲間との軋轢にもあったようだ。アメリカ白人とのボランティアとしての活動の相

違を、彼女は淋しそうに語る。同じ市民権をもつ者同志とはいえ、白人と、クメール民族としての彼女のカンボジア難民を見る眼は、同じ奉仕活動の中でも微妙な差を生み、現在置かれたカンボジアの立場から、どうしても白人に従わざるをえない自分の状況に唇を噛んでしまうことも多々あるとのことであった。確かアランヤブラテートと一緒に昼食をした時であったと思うが、私の質問に答えて彼女は流暢な英語で、アメリカ国内での厳しい人種差別を語り、身の上話しをしてくれた。

そして M さんにとって、現在一番辛い思いをしているのは、クメール人同胞からの感謝の微笑の中にひそむ冷たい眼差しであった。いわば亡命の形でアメリカ市民権をとった M さんに対する同胞からの感謝と羨望と裏腹にある根強い不信感、彼女が一生懸命同胞の中に入り、彼等の為に活動すればする程、彼女の意に反して募ってしまうということである。私は M さんにもそして難民の人達に対しても、何も言うことができない。自分の意志と難民の表情のはざまにあって、悩んでいる彼女に対して、私は何ら語りかけるべくすべもちあわせていなかった。余り多くを語らない M さんの、やさしい、そして愁いに充ちたその顔に、実は語りかける多くのものがあ

ったような気がした。せいぜい私は挨拶がわりに次のような台詞を最後にいうだけだった。「是非アンコール・ワットを、貴女の案内で観たい」と。彼女はちよっと笑って「アイ・ホープ」と答えた。

(三) Fさんのこと

Fさんはブロンベンの大学を出た技術畑の人で、ベトナム進攻があった一九七九年に難民としてくに境を越え、バンケンのホールディング・センターに収容された。両親は未だに行方が知れないが、多分死んでいるだろうとのことだった。キャンプ内で結婚し、奥さんの方の家族（五人）と一緒に住んでいた。教育経験をかわれ、キャンプ内のEDC（教育開発センター）のスタッフになり、私と同行したYさんとは以前から教育関係の仕事で親しくしていた。Fさんは「アメリカとか日本のような自由な」カンボジアでありたい」と私の一回目の「キャンプ」訪問の際にいった。

昨年（八一年）三月の二度目の訪問の時、FさんはYさんに日本定住の希望を告白した。告白するまでの彼の心のうちを察すると、彼の相当なる葛藤があったことが相像される。難民の子供達を教育する立場にある彼が、その「職場」を離れ、或いは置き去りにし、故国ではな

く、第三国へ移住するということは、一種の裏切り行為になることでもあるし、とにかく同胞を捨てることである。他の多くの国外移住者、或いはその希望者にもいえることだが、もしカンボジアが「安定」した時、はたして彼等は、スムーズに（政治的にも、そして心理的にも）帰国できるのであろうか。又Fさん個人だけの問題ではなく、彼の家族に異国での慣れぬ生活をしていることでもある。Fさんの決心までの苦渋は、はかりしれないものがある。しかし一方Yさんにしてみれば（実は私自身の思いもそうなのだが）、立場が違うとはいえ、難民の第三国移住に手をかすことには、悩まざるをえない一面もある。即ちFさんが抱いた苦渋を何らかの形で払ってしまふことにもなるからである。同胞への裏切り行為（それが真に裏切りなのかどうか解らないが）に手助けすることになってしまふ。それに又、定住先の日本での生活が彼等家族を本当に幸せにするのかどうかも甚だ不安と疑問のあるところである。YさんはFさんと多くを語り、最終的には日本定住を決めた²⁾。Yさんは日本国内に於いて、法務省や外務省とかけあい、早ければ今春（八二年春）にも日本に実際の定住が許されるとのことである。（日本政府の場合、難民受け入れには、その難民の日本

での留学経験、日本企業に勤務した体験、親戚の有無等を条件に出している。Fさんのケースは例外に属する。

日本での就職先もほぼ定まったところで、今回キャンブ訪問のおり、YさんがFさんにその由を伝えたところ、彼はほっとした表情と同時に厳しい顔つきで、就職の条件をYさんから聞いていた。Yさんの語調にも決して樂觀を許さないものがあつた。ちょうどFさんの家を訪ねた時、Fさんと奥さんとの間に赤ちゃんが生まれたばかりであつたが、その赤ちゃんの名前はセリーといつた。セリーちゃんを見守る奥さんや家族の人びとをそれとなく見ていた私は、祝福の念にオーバラップして、Fさん一家の今後の不安ななりゆきを思つて複雑な気持ちになつた。そして我々（Yさんと私）のFさん一家の訪問を眺め、訪問の意味するところも既に知つていた隣近所にいた難民の人びとの無関心を装うその眼を意識した時、私はなまあたたかいうずきのようなものを感じた。

(1) 一九八一年七月に国連主催で「カンボジア国際会議」が開かれ、次の三点を宣言として採択している。

即ち①カンボジアからの外国軍隊の撤退、②国連監視下での自由選挙の実施、③国連安保理事会常任理事国による中立カンボジアの保障。（ベトナム、ソ連はこ

の会議をボイコットしている）

(2) 吉岡淳「ヘムさんへの手紙」（国際教育フォーラム「国際教育フォーラム」八第一〇号・一九八一年V所収）参照。

六 難民キャンプの学校

難民キャンプ内の大人達の不安と悲哀と虚脱状態に比べると、子供達の表情は大変明るく見えた。特に十二、三才頃までの小さな子供達は、今自分達が置かれてゐる状況を、おそらく理解することができないせいでもあろうが、殊更無邪気に見えた。勿論、逃避行の通りの悲惨な思いや肉親を失つた悲しさを、その小さな胸に抱いてゐるのではあろうが。しかし今在る彼等の状況は少くとも彼等にとっては安住の地である筈であり、そのせいか表向きは明るく見えた。彼等は、よく遊び、よく働いていた（水汲み、子守りは子供達の仕事であつた）。

彼等の教育全般については、EDC（教育開発センター）が組織され、その運営にあたつてゐた（ラオス難民キャンプ、「難民村」ではそれにかわるものがあつてゐる）。以下、特にカンボジア・ホールディング・センタ－のEDCの創設の経緯及び教育事情について最後に

触れておきたい。それは私に大変重要な課題を提供してくれたし、又今後の難民問題或いはその教育問題を考察する時、大きな示唆をあたえてくれるようにも考えられるからである。

一九七八年暮れから七九年にかけ、大量のカンボジア難民がタイに流入し、キャンプが開設された頃は、子供達に関してはまず彼等の栄養補給と病氣治療が何よりもの先決問題であった。そしてUNHCRの援助と各国ボランティアの活躍によって子供達の身体的立ちなおりがみられた七九年の半ばあたりから、次の段階として、難民の子供達の教育に力が注がれるようになった。UNHCRは、タイ政府の許可を得て、本格的に教育開発に乗りだしたが、教育内容についてはユネスコにも応援を求めた。UNHCR、ユネスコ、そしてタイのスリナカルン大学（教員養成大学）を加えた三者で、プロジェクト・チームをつくり（ス大学のアリー教授を中心として）、カンボジアの教育事情を鑑み乍ら、キャンプ内学校のあり方と開設の準備が、研究・企画された。まず実施されたのは、難民の中の教師体験者の発掘であったが、実はその段階で手間取ることになった。ボル・ポト政権下では、いわゆる知識人は過酷な冷遇を受け、中には大分殺

されたり、強制労働によって病死させられた者が多く、タイ流入の難民に教師が少なかったことと、例え教師だったとしても、恐れて身分を明かさなかった者がいたという事情がそこにあつたからである。しかしカオイダン・キャンプの場合、二十数人の教師体験者がやっと見つかり、彼等教師と先の教育プロジェクト・チームとのたび重なる話し合いをへて、カンボジア人の構成によるEDCが組織され、七九年十二月に初めてキャンプ内に学校が創設され、授業が開始された。他のホールディング・センターもカオイダンに倣って次々と学校が開設されていった。

私が初めてキャンプ内の学校を訪れたのは八〇年八月であつた。ヤシの葉と竹でつくられた、床はそのまま土の暗い教室ではあつたが、子供達は元氣そうに若い教師の話しを聴いていた（その後バンケンなどでは、かなり立派な教室が創設されている）。子供達のうちにはボル・ポト政権下で殆ど教育を受けていない者も多く、七才と十二才の子供が同じ教室で同じ内容の授業を受けるということもあつた。カンボジア国内と同様、五年制で、教室、先生の数の関係で、一日二時間三部制で授業が行われた（現在は一日三時間半、二部制）。八〇年四月の

段階では生徒数約二万五千人、教師数二九〇人で、八二年一月には生徒一万五千人、教師三二〇人になった（難民総数は故国帰還、国外移住によって減少している）。現在でも一教室に約六十人から七十人の生徒数なので、すし詰め状況である。課目は最初のうちは国語（クメル語）、算数ぐらいであったが、その後音楽、体育、理科、道徳等が加わっている。社会（特に政治・経済面）については、タイ政府の意向もあって、積極的には取り扱っていないようである。教師は、EDCが、EDCによる教員養成所で訓練をした青年達に、一応の教員資格をあたえることによって確保されている。

学校開設後のひとつの難題は教科書であった。まずクメール語の教科書そのものが殆ど無く、UNHCRの各国への呼びかけでやっと手に入れた。しかし子供達の手には教科書がゆきわたる為には、かなりの費用がかかる。そこで八〇年五月頃よりユネスコの民間団体である日本ユネスコ協会連盟によって、インドシナ難民教育援助事業としてコアクシオン募金（前述・四の「註」(1)を参照）が日本国内で大々的に行われ、相当額の浄財を得て、教科書の印刷にあてられることになった。又そのことは、経済的支援という意味の他に、政治という壁をうち崩す

役割もあった。つまり公の国連機関による「人道的」な援助なら許容されても、教育という「開発」部門にまで国連が積極的に支援することになれば、カンボジアのヘン・サムリン政権（及びその支持国）からすると利敵行為とみなされ、国際問題を生じさせることになるという（国連は目下ボル・ポト政権、キュー・サムファン政権を正式なカンボジア政府として承認しているが）。であるならば人道的か開発的かは別として、政治面での国連機関の躊躇を超えて、NGO（非政府組織）が教科書援助を実質的にしてしまえば、最終的には難民の教師と子供達が結果として教科書使用が可能になる。日ユ協連の事業及びその支援者の行為が、政治の壁の前で非常に効果的な役割を演じたことになるわけである。

教科書はカンボジア人自身によって（即ち他国が介入せず）編集発行され、しかもタイ国内で印刷され（キャンプ提供国タイにいくばくかの金が落ちる）、子供達や教師達の手に届いた。その教科書は、八一年始め頃には難民村（カンボジア領内）までに届き、途上国カンボジア国内の教育開発にも貢献し始めているとのことである（もっとも各教科書の表紙に印刷されている「EDC」は消されて使用されているということだが）。

EDCは、小学生の学校教育の他に、「教育ダンスセンター」を開き、舞踊と音楽の訓練にも力を注ぎ、クメール文化の伝承に努めている。私も子供達の踊りとそれを伴奏する大人達の民族楽器演奏を観たが、ひたむきな

役等の民族文化に対する愛着をひしひしと感じたと共に、その踊り子を観ていたある母親らしい人の涙を忘れることができない。コーアクション募金による援助によって、その後子供達のみならず、青年達をも対象にした図書館も開設され、又現在教材・教具等の補充も行われている。EDCによる教員養成所も充実がはかられ、教師用の教育手引書も、印刷されている。キャンプの小学校を卒業した子供達、或いは故国でその過程を終えた子供達の為

に中学校段階の教育施設を創設しようという動きもあるが、タイ国内の学制では義務教育が、小学校四年ないしは六年ということもあり、中学校の存在にはタイ政府も認めかねているのが現状のようである。但し小規模には要望のある子供達には指導がなされているようである。

(約二五〇人の生徒、十五人の教師、課目は数学、化学、物理、生物、英語、クメール語等。バンケン・ホールディング・センター、八一年八月現在)。

難民キャンプ内で、学校や図書館で学び合う子供達や

教師達を見ている限りでは、何か救われるような気持ちになり、将来のことを思うと、かすかではあるが、そこに曙光を見出しえたようにも感じた。

カオイダン・ホールディング・センターには六か所、就学前児童の為の幼稚園もある。うち二か所は、いち早くキャンプ入りして小さな子供達の為に援助活動をした日本人Tさんを中心になっている「若い難民を考える会」によって開かれたものである。今回私が訪ねたそのうちのひとつである「希望の家」には約三〇〇人の園児(三才から六才まで)、十人の保母さんがいた。保母さんは現在全員カンボジア人であった。それに四人の日本人女性とひとりのタイ人女性がスタッフとして存在し、主にキャンプ外との交渉にあたっていた。もともとカンボジアには幼稚園制度は無く、就学前児童教育に関して、Tさんはゼロからやり始めなくてはならなかった。しかし今では、全面的にカンボジア人保母さんが児童保育にあたり、全面的にカンボジア人保母さんについて、カンボジア人自身がその指導にあたっていた。

開園の最初のうちは、生活習慣上慣れないこともあって、小さな子供達がなかなか寄りつかなかったそうだが、母親(父親も)に技術(刺繍、裁縫、布織り、その他手

芸）指導もするということで、親子ぐるみ来園させ、次第に子供達が増えていったということである。既に各々の技術指導にも、今やカンボジアの女性があたっているとのことである。園内では作業場があり、父親であろうか、文字通り手造りで、子供達の教育玩具を作成していた。私が訪ねたおり、ちょうど手芸養成所では、卒業式（？）があり、若い娘さんも含めて、皆正装である無地のスロンに身を装い、ニコニコしていた。それは不安な彼女等の生活の中のひとときのやすらぎの時といった感じであった。前回（八一年三月）、アメリカ・ボランテニア・グループによる幼稚園を訪ねたことがあったが、「希望の家」の方が活気を帯びており、子供達も含めてカンボジア人が生き生きとしていたように思えた。それは必ずしも日本人職員だけのせいでもなさそうである。園の活動資金を集める為、奔走しているTさんにバンコクで会った時、彼女は次のようなことを私に話した。

「発展途上国の、しかも今難民であるという異様な状態にあつて、幼い子供の養育がどうあるべきかを、幼稚園を始めるにあたつて、まず考えたものである。他国の援助によって、ものを貰っている（本当は貰わざるをえないのかもしれないが）親の生きざまから、

子供が学ぶとすれば、ものは全て他人からあたえられるものとしてしか考えられないということであろう。これは大変なことなので、ものを自らの手で作るという工夫が、いかに大切であるかということを彼等知って貰いたかった。ものをつくる機会のないキャンプ内の親達に、園児集めの目的もあったが、技術を身につけて欲しかったのもその理由からであり、又どんなに小さな遊び道具でも、その辺の木片やがらくたから利用してこしらえられるのだということを子供達に解って貰いたかった。そしてそれは全て彼等の故国（特に農村）で本来自然に行われている筈のことである。従つて、最初の技術的な面では、なるべく日本人の価値観をもち込まないという大前提で、最低の指導はしたが、あとは彼等の本来のやり方に任せた。」

Tさんの活動を側面から援助しているユネスコ（バンコク）のオフィサーであるLさん（スリランカ人）は、Tさんの幼稚園での養育の仕方を高く評価し次のように語った。

「『近代化』を押しつける形で先進国のやり方ではなく、民族性を生かす方法でのTさんの養育は素晴らしい。親を巻き込んでの保育方法は、根についたも

のである。英米流の教育方針では、途上国、特に難民の子供達にはダメージをあたえるだけである。いや、Tさんがそのきっかけをつくった、彼等カンボジア難民の民族性を生かした教育から、むしろ先進国が学ぶものさえあるかもしれない。又Tさんがやっているクメール人のイニシアティブによる「教育」は、将来カンボジアに難民が帰れることになった時、特に農村などでは大きな効果をもたらすであろう。親を絡ましての子供達の仲間意識の育みは次のような成果を生みだしている。キャンプに流入してきた頃、子供達はヤシの葉でつくられた家の壁に、竹の棒を使って突いて遊んでいた。つまり人殺しの真似をしていたわけであるが、現在はそのようなことはいっさい無くなってしまった。私はTさんのブレ・スクール教育を他のキャンプ、いや他の発展途上国にも広げていきたい。」

難民問題について強い関心を抱き乍らも、日本国内で伝えられる難民の実相の報道に、何かつくられたもの、そして何か同情だけを無暗と求めているものとしか感じとっていなかった日本の高校生達が、実際自分の眼で難民の実態を知り、そこから難民問題に更に深く関わらね

ばと考えて、男女あわせて八人、キャンプを訪ねた。日ユ協連のYさんの他、私も含めて数人の高校の教師も加わった（一九八一年三月）。

彼等高校生は、日本から日本の児童が描いた絵や、自分達がつくったおり紙の作品や、日本に古くから伝わる子供用玩具等を携えてキャンプの学校を訪ねた。クメール語で、カンボジアにも伝わる日本の歌を覚え、ギター、笛なども手にして、彼等はカンボジアの子供達と会った。そしてその時EDCの協力をえて、子供達と日本の高校生達とのささやかな交歓会が催された。

カンボジアの子供達は、クメール舞踊を披露してくれた。そして高校生達は、合奏や独唱、合唱で返礼した。その間、EDCの教師達が幕引きなど裏方さんとして、必死になって動き廻ってくれた。高校生の代表が、なぜ難民キャンプを訪ねたかを語った。それは日本の教師によつてまず英語に通訳され、カンボジアの教師がそれをクメール語になおし、そして子供達に伝えた。確かにどこかし気な時がそこに交錯したが、しかしそのひとときにも、子供達と高校生達の笑顔は絶えなかった。最後に、私がかつてで、日本の歌「幸せなら肩たたこう」を歌い、参加者皆にも合唱を促した。一部のカンボジアの子

供達には知られているメロディーであったからである。

互いに肩をたたき、手を握り合い、床を踏みならし合った。私も道化に徹し、汗だくで振る舞った。明るく和やかな一瞬だった。EDCの校長先生の挨拶があつて、我々はその場を去った。

しかし私には、どうにも自己満足に陥ることさえできない心境であつた。淡っぼい隙間が、心の中に広がるのを覚えた。道化になりきろうとして、結局なりきれなかったのは、本当は、*「幸せでない」*子供達こそが、道化ではなかったかと思えるからであつた。私は彼等の悲しい道化の眩きが、実はあの笑顔の底にあることを知っていた。Yさんが中心になつて編集し本にした難民の子供達の絵とそれにつけられていた彼等のコメントの一節が、今笑つていた彼等の顔に重なつて思ひだされてきたのだ。

「……みんないっしょに村から逃げた、森のなかを、ずっと……、おそろしかった、けものじゃなくて、兵隊がこわかった……。木の根っこや葉っぱ、食べれるものはなんでも食べた。そうしているうちに、弟が死んだ。妹も……。いまも、思い出すたびに涙がでてくるんだ。……楽しかったこと？ そうだな。海で魚をとったときかな。ここのキャンプじゃ、魚はあんま

り食べられない。たいていカンヅメだ……」⁽¹⁾

政治の渦の中に巻き込まれ、しかもその力学の厳しい法則の具となつてゐる悲しいビエロ達は、世の無関心とあきらめという観客の前で、小さな小さな道化芝居を、いたいけな手振りで演じさせられてゐるように思えた。同行の高校生達の眼には、子供達がどう映つたのであろうか。

年齢的には十四、五才、日本では中学生か高校生低学年ぐらいの難民の少女達十二、三人と日本の高校生達とが交流する機会があつたが(EDCの教師、同行の日本の教師も加わり、主に通訳にあたつた)、そこで高校生達が、彼等からえた話しの内容は、キャンプの表面の明るさと安定さとは裏腹にあつた重い悲しいことがらであつた。今さら乍ら、難民達が抱いてゐる柵の中の不自由感、前途への絶望感、そして勉学のままならないいらだちを、高校生達はなまの声を通して知つた。そして彼等少女達からさかんに日本でのスポンサーになつてくれと、懇願されていた。柵の中の今の状況から、ひとときたりとも早く脱して国外移住したいという彼等の気持を、いやという程高校生達は知らされた。そう簡単にスポンサーなどになれないことを知つてゐる高校生

達にしてみれば、一体彼等の為に今自分が何ができて、何をどうすべきなのか、その答えを考えて、おそらく戸惑ったにちがいない。協力すべくすべを見失ってしまった高校生達は、「難民」という現実の前で、次第に無力と虚脱を味合わされたにちがいない。そしてそれは全く私自身が嘗めざるをえない苦渋でもあった。その場で私と個人的に話していた、難民の少年少女のめんどろをみていた筈のEDCの中学部門のチェアマンによって、既に自分のアメリカ移住が定まって現在待機しているのだと教えられた時、私は何かめくるめくような複雑な心持ちになり、少年少女達と高校生達を思わず眺めた。それは一種の不条理な光景であった。

しかし高校生達の帰国後の行動を見ていて、私は、その行動が例えシジフォスの石運びと映っても、救われるような気持ちになった。彼等はキャンプで会った「友人達」に手紙を出し続けているし、学園祭では精一杯、その友人達の痛みを学友に訴え、又街頭に出てはコーアクション募金で声をからしている。私も彼等の行為に刺激され、難民キャンプ内の学校教育や幼稚園保育に一縷の望みを心底から託しつつ、そっと彼等高校生の背後で、いくばくかの協力をして、難民の子供達のかりそめでし

かないかもしれない幸せをそれでも願っているのだ。

くに境に点在する難民キャンプの学校は、ラオス難民のキャンプを除けば、大体開校以来二年少々経っており、その運営も定着し始めてきているとはいうものの、政治の動静によっては、大巾に子供達や教師の異動があり、教育上支障をきたらすこともままあるという。自由を束縛された教師達、そして特に無告の子供達は、故国の山河を真近にして、彼等の自由な生活と自然と動物との接触を奪われ、鉄条網の中に囲い込まれ、無為の時を過している。国境線上の難民村の子供達は、銃声の下に脅えている。学校は、だからひとときのささやかな憩いの場でもある。しかしたったひとことのタイ政府の命令で、難民キャンプの学校の住民達は別の場所に移住させられてしまいう状態にある。

そのような状況下で我が身の将来を案じ、そしてキャンプ内での忍ぶ限界を感じざるをえなくなった教師達のうち、教え子を見捨てて、国外移住を望み、かつそれを実現する者があったとしても、私にはそれを責める何ものをもっていない。しかしある日忽然と自分達を教えていた教師が、自分達の前からいなくなり、国外に移

住したと聞いた時、一体子供達はどういう気持を抱くのであろうか。とやかくいえる立場に全くない私ではあるが、そのような子供達を思つて、教師達も含め、いわゆる知識人の多くが国外移住を希望していることに、私は心の片隅に何かひっかかるものを感じる。故国の将来の「平和」を担う子供達に対するひたむきな教育（広い意味で）が、今こうした異状な状況にあればこそ、殊更要求されると思われるのに、止むなくてはあろうが、貴重な人材が少しでも失われるということに、やはり私は、わだかまりを起こさざるをえないのである。カンボジア難民ではないが、ベトナムのランド・ビープルの難民の、ある若い教師のことだが、私には未だ忘れられない。苦難を一瞬忘れたかのように彼は眼を輝かし乍ら語つてくれた。

「子供達には、ベトナムの歴史を特に学んでもらいたい。またベトナム人としてベトナムをどう考え、どう生きていくかについて私達も教えたい。私達はいつかはベトナムに戻る日のあることを確信して（子供達を）教えている。子供達が考察力のあるかしい子になつてほしいし、彼等自身で明るい将来を作つてほしいと願っている……」(2)

わざわざ休暇をとり、しかも自費で各地のキャンプの学校を精力的に廻り、カンボジア人やラオス人の教師達と密に接触を重ねているユネスコ・オフィサーのLさんは、国外移住の知識人については、はっきりと不信の念を抱いていた。

「キャンプ内の大部分の難民は、故国に帰還することを願っている。国外移住者は、結局は戻るまい。例え戻つてきても、権力的為政者と結びつくエリートとなり、かつ権力者と同様、先進諸国にしか常に眼が向けられないであらう。キャンプにとどまり、子供達と苦難を共にした教師達と、その教育下にあつた多くの小さな民衆達こそ、民衆の為の社会を故国に築きあげていくことであらう。」

Lさんの鋭い指摘には、私も同感する部分が殆どではあるが、先に触れたVさんやFさんの苦衷を察すると、にわかには全面的な賛意が表せられない。しかし確かに彼等難民の背景にある政治的利害関係の複雑性が厳存することとそう簡単に解決への道が見出されない今日の情勢とを考えると、Lさんのいつていることに大きな意味があるように思える。どのような難民の状態の変化が今後あらうとも、教育によって得られたものだけは、

確実に彼等自身のものになり、民衆の力となって残されていく筈のものである。そうであるならば民族性を十分に生かした教育にうち込む教師が、このような異状な状況下でも、或いはそのような状況下であればこそ、ひとりでも多くキャンプにとどまり、子供達に会い接してくれることを私はほのかに期待せざるをえないのである。そして彼等と彼等の下にある子供達に対して、もし柵外からの我々の協力が可能であるとすれば、やはりキャンプ内の学校教育に関する強い関心度をもった息の長い支援であらうと思う。

- (1) 日本ユネスコ協会連盟編「ふるさとカンボジアは遠く——戦禍の中の小さな画家たち」(第三書館・一九八〇年)五六ページ参照。なおこの画集発行までの経緯については、吉岡淳「難民と同時代を生きる——難民と私たち」(地平線会議編「地平線から——一九八〇」・一九八一年所収)を参照。
- (2) 「カンボジア難民キャンプ報告記録」(国際教育フォーラム「国際教育フォーラム」第八号・一九八〇年V所収)三二ページ参照。

七 再び国際理解教育について

——「あとがき」にかえて

国際理解教育の重要性とその教育のあり方を問い、しかも発展途上国特に東南アジアへの関心を深めることの必要性を私は主張してきた。かつ東南アジアの中のインドシナの難民に焦点をあわせ、理解と協力のしあえる部分としない部分を、私の難民キャンプ訪問から受けた印象と絡ませ、紆余曲折をへ乍らも述べてきた。『難民』

という特殊な状況下にある人びとの生きざまとなりわいから、東南アジア全般の人びとと彼等を囲む国際状況を一般化して見ることは、或いは妥当ではないかもしれない。しかし私がくに境を歩き考えたことは、難民及び彼等がおかれた状況が、決して彼等そして彼等だけにまつわる特殊状況ではなく、東南アジアにおいては発展途上国全般に同じくまつわる問題状況だとも思えた。いわば『難民キャンプ』に現在の国際社会の縮図を見た思いであった。先進諸国の国益優先主義やそれに影響された途上国同志の相克が、ごく普通の民衆を疎外状況に追いやる形態は、何も難民だけに限ってあるものだとは思わない。汎く構造的暴力による犠牲が、結局は、無告の民にしいられているという状況は、難民そして途上国の

人びとに同じようにあてはまるのではないかと考える。そしてこの点の醒めた、かつ緻密な把握理解は、国際理解に関する教育にあたつての重要な条件要素ではないかと思われる。

東南アジアの一角、タイの国境の町アランヤプラテートは、かつてはフランスのインドシナ植民地支配の前哨基地であつたし、続いて日本、そしてアメリカのインドシナ勢力拡大の爲の重要な基地の町でもあつた。そして今日、カンボジア内政混乱に乗じて、ヤミ商人が屯ろするヤミルートベースキャンプの町である。しかしそのような町の情勢とは全く無縁の子供達が、その前庭で遊び興じているホテルの一室に八人の日本の高校生達と数人の教師が集まり、さつき露店から買ってきた名もしい不思議な果物を、苦勞してむいていた。そして彼等はその果物を口に頬張り乍ら必死な面持ちで難民問題について語り合つた。ホテルといつても、その部屋の窓にはヤモリがはりつき、床にはねずみが行きかうような木賃宿で、部屋には、たよりなげに扇風機がまわっており、それがかえつて熱風をまきちらしていた。猛暑下の話し合ひではあつたが、その話の内容は、各々の心に冷た

い衝撃をあたえた。

難民の少年少女達にスポンサー・シップを哀願され、我が身を振り返り返答に窮したこと、就学前の女の子に別れぎわ、きつく抱きつかれ、思わずこちらも強く抱きしめてはみたものの、それ以上のことができない自分を見つめ悲しくなつたこと等、高校生達は単なる難民との心の触れあいだけではどうにもならないことを、感情をおさえ乍らも語つた。日本国内で被差別部落の問題に関わつてゐる教師は、差別という側面から、第二次大戦敗戦直後中国の東北部から日本へ引揚げるとき、悲惨な体験をもつた教師は、逃避行の苦しさという点から、そして日本の東北地方の過疎地で廃村になつたがゆえ、泣く泣く町に移り住まざるをえなかつた老人の話しを聞き、思い悩んだ経験をもつ教師は、生れ故郷を離別する悲しさという観点から、各々難民キャンプ訪問の印象を高校生達に聞かせた。高校生達は、とくにエキゾチズムの浸たりから脱し、安っぽいヒューマニズムと同情の域を超え、厳肅なる事実と固い政治の壁とそれらによる難民や途上国の人びとの不安と悲しみの日常性を肌身で感じ始めた。私と同様であつたが、彼等も又、観念的なアジア観、そして難民に抱いていた甘いイメージをも

ろくも崩さざるをえなかったようである。そして話し合
いの終りの頃には、ひとりひとりが自分達の安逸なる日
常性を顧み、自省の姿を見せるようになってきた。

荒涼たる難民キャンプの光景とその背後にある国家の
論理のはざまにあって、したり顔でわけあり気なりアリ
ストをきめこむとすれば、結果的には傍觀者の立場をと
ることになってしまう。もしそうであるならば、それは
政治力学ゲームを弄ぶ悪しき輩とその周囲を埋める茶坊
主どもと何の隔たりも無いことになろう。結局は現状追
随主義者のそしりを免れない。私も含めて若者達が今要
請されていることは、キャンプや途上国の生きた民衆の
リアルな痛みを、時にはもどかしさを味わっても、共に
感じあえる道を、ひたすら探る行為者としての生き方であ
ろう。

……帰国後、各々の役割分担の範囲で、難民や途上国
問題をまず周囲の人びとに訴えた。教師達は教場で、高
校生達は仲間達の間で。同情をただそそるだけでなく、
そして声高でなく、地道に。民族の異質性と「近代化」
の意味を深く理解しようとし乍ら。

難民キャンプを訪ねた高校生達は、訪れなかった仲間
達と共に、彼等なりの努力で難民達との同時代感覚をで

きるだけもとくと、積極的に難民問題をテーマにして行
動した。難民の少年少女達との文通に始まり、コーアク
ション募金、論文の作成、ユネスコ高校大会での発表、
各校学園祭での発表。そして日本国内で差別されている
人びとに対する協力活動への取り組みも含めて。又ある
者は学校というものに根づく格子なき牢獄性を糾弾し、
想像性を阻む欺瞞性（管理主義？）を暴いたりもした。
私は彼等若者達の行動から、私自身多くの国際理解教育
の教材研究の資料を得た。

難民キャンプを訪れたおり、私はバンコク郊外のスラ
ム街にも何回か足を向けた。インドシナ難民のかかえる
問題と必ずしも同根でない部分があるにしても、視点の
おき方には共通する部分が多々あるようにも思えた。私
は、今後インドシナ難民問題と並行して、視点の角度を
世界の他地域の難民、或いは最貧国の人びと、或いはい
わゆるマイノリティの人びとの各々の問題にも広げてい
きたいと考えている。勿論各々の共通する問題部分と共
通しえない問題部分とのきめ細かい分析をした上でであ
る。カンボジア難民問題をひとつ取りだしてみても、そ
のないうごく問題の相違点が種々あることを、いやと
いう程私は難民キャンプ訪問で知らされた。

教師として私は「難民キャンプ」訪問により多くのものを学んだ。それらを貴重な教材にして、国際理解教育、そして平和教育の為のカリキュラム作成に色づきをつけた。そして私とあい接する若者達が、いくらかでも醒めた感覚をもって難民問題やアジア問題に、かつそれらの背後にある政治・経済のメカニズムに関心を抱くようになるように努めたい。くに境の難民キャンプにとどまり、故郷に帰ることを願って今日も子供達とあひ対しているだろう教師達と、そしてあの「小さな民衆達」の痛みを少しでも分かち合える為にも。

(1) 学習院高等社会問題研究会「カンボジア難民問題と我々」△概要▽（日本ユネスコ協会連盟「ユネスコ新聞」一九八一年六月一日号）参照。

各々の「註」にあげなかったが、その他の参考文献の中で主なものを付記しておく。

衛藤藩吉「無告の民と政治」（東大出版会）

鳥羽欽一郎「発展途上国と日本人」（講談社）

スーザン・ジョージ「なぜ世界の半分が飢えるのか

——食糧危機の構造」（朝日新聞社）

三浦朱門監修「翔べ、途上国に——国際協力にかける

青春」（三修社）

森治樹監訳「南と北——生存のための戦略」△ブランク委員会報告▽（日本経済新聞社）

游件勲他「南北問題をみる眼」（有斐閣）

川喜田二郎「海外協力の哲学——ヒマラヤでの実践から」（中央公論社）

「技術と経済」（科学技術と経済の会）

“Appropriate Technology Sourcebook”
（Volunteers in Asia）

梅棹忠夫「文明の生態史観」（中央公論社）

梅棹忠夫「東南アジア紀行」（中央公論社）

「探險と冒険」②（朝日新聞社）

高坂正堯「海洋国家日本の構想」（中央公論社）

鶴見良行「アジアを知るために」（筑摩書房）

斎藤吉史「国際史の中の東南アジア」（TBSブリタニカ）

矢野暢「『南進』の系譜」（中央公論社）

青木保「タイの僧院にて」（中央公論社）

谷恒生「バンコク楽宮ホテル」（講談社）

内藤泰子「カンボジアわが愛」（日本放送出版協会）

在日インドシナ流民に連帯する市民の会「流民」（論創社）